

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊

# 津島岡大遺跡 9

—第14次調査—

(福利厚生施設南棟新営予定地)  
BB・BC12区

1997年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊

# 津島岡大遺跡 9

—第14次調査—

(福利厚生施設南棟新嘗予定地)  
BB・BC12区

1997年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 序

本報告書は、岡山大学福利厚生施設南棟建設にともない、1995年度に実施した津島岡大遺跡第14次発掘調査の成果をまとめたものである。

調査地点は津島キャンパスのほぼ中央に位置し、1992年度末から1993年度前半にかけて実施した第10次発掘地（保健管理センター）の西方約50メートルにあたる。第10次発掘では、比較的小面積であったにもかかわらず、弥生時代から古墳時代にかけての住居・井戸などの遺跡が密集していた。そこで当初、今次の発掘調査地にも関連の集落遺跡がひろがる可能性を予想したのであったが、調査の結果、発掘範囲の中央部は縄文時代に形成された北東～南西方向の浅い谷地形で占められることが判明した。南東部において、第10次発掘で確認した集落がのると推定される微高地の一端をかろうじて検出すこととなった。

縄文時代の谷地形の部分は、弥生時代以降、土層の埋積を重ねながら水田として利用された。またこの水田域と南東部の微高地との境界付近には、北東から南西に流れる小規模な溝が各時期にわたって穿たれた。弥生時代後期から古墳時代前半期に属する水路のなかには、第10次発掘で確認した集落に住んだ人びとと直接関係するものがあるかもしれない。報告書刊行の順が前後してしまったが、いま第10次発掘の成果についてあらためてふれる予定である。

発掘調査、出土資料整理、報告書作成等にあたっては、本学事務局をはじめ関係各位からご支援とご協力をたまわった。あらためて各位にお礼申し上げる次第である。

岡山大学埋蔵文化調査研究センター長

稻 田 孝 司

## 例　　言

- 1 本書は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、1995年10月25日から1996年2月14日までの期間で行った福利厚生施設南棟新営工事に伴う発掘調査（津島岡大遺跡第14次調査）の報告書である。
- 2 調査地は、岡山市津島中二丁目1-1に所在する。
- 3 発掘調査ならびに報告書作成までの諸作業は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会・同運営委員会の指導のもとに行われた。両委員会の委員・幹事の方々に御礼申し上げる。
- 4 発掘調査は岩崎志保と横田美香が担当した。
- 5 本地点の調査概要は、『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13に一部を報告しているが、細部にわたる事実関係は本書をもって正式のものとする。
- 6 本書の執筆は、第1章と第2章は岩崎志保が、第3章と第4章は横田美香が担当した。第1～4章の執筆内容は横田と岩崎の協議に基づくものである。第3章のうち、遺物の觀察表は山本悦世が担当した。編集は、稻田孝司（埋蔵文化財調査研究センター長）・新納泉（埋蔵文化財調査研究室長）の指導と助言のもと、横田が担当した。
- 7 本書に掲載の図面・写真のうち、調査現場における実測図・写真是岩崎・横田によるものである。遺物については、土器・土製品の尖測・浄書を山本が、石器の実測・浄書を横田・猪原千恵が、写真撮影を横田が行った。遺構の図面編集は岩崎・横田が行い、浄書を横田と猪原が担当した。
- 8 その他の整理作業においては、萩野早苗・片山純子・黒森美代子・宇藤桜子・井口三智子の協力を受けた。
- 9 石材鑑定は、鈴木茂之氏（岡山大学理学部講師）に依頼し、有益な教示と助言を得た。記して感謝申し上げる次第である。
- 10 本書に掲載した調査記録・図面・写真・マイクロフィルム・出土遺物等は、すべて当センターで保管している。
- 11 本書における表記および記述に関する凡例は以下の通りである。
  - (1) 図・図版の縮尺は、原則として以下の通りとする。

〈図〉 遺構…溝：1/250　土坑：1/30　各断面：1/30  
遺物…1/4  
〈図版〉 遺物…約1/3

例外のものも含め、各々についてその縮尺を明記する。

(2) 遺構名は、本文および図中で、次のような略号を用いて称する場合がある。

上坑：SK 满：SD 满状遺構：SX 土器集中部：SY

(3) 遺物番号は、原則として遺構別に付す。

(4) 遺物觀察表は、本文中に実測図とあわせて掲載する。

(5) 遺物觀察表中の表記方法は以下の通りである。

①土器の法量は、

- ・残存部分が全周の1/2以上：実計測値を示す。
- ・1/2未満の破片から復元値：「\*」を付けて示し、別に残存率を記す。
- ・残存値は（ ）を付して示す。

②土器胎土の粒度表記の基準

微砂：径0.5mm以下 細砂：径0.5～1mm 粗砂：径1～2mm 細礫：径2mm以上

③色調：欄中に並記している場合は「内面、外面」の順番で表記する。

陶磁器では、「胎の色、釉の色」とする。

(6) 従来は突堤文土器が出土する時期を突堤文期と仮称してきたが、本報告から弥生時代早期と統一する。

(7) 本書で用いる高度値は標高であり、方位は真北を示す。

(8) 本書で使用した地形図は、建設省同土地理院発行の1/25000地形図「岡山北部」および「岡山南部」である。

## 目 次

第1章 遺跡の位置と周辺遺跡の概要	1
第2章 調査経過	6
1. 調査に至る経過	6
2. 調査組織	6
3. 調査の方法と経過	7
4. 調査の概要	8
5. 調査区の位置と区割り	9
a. 位置	9
b. 墓内座標の設定	9
c. 調査区の区割り	10
第3章 調査の成果	11
1. 層序と地形	11
a. 層序	11
b. 地形	15
2. 縄文時代後期・弥生時代前期の遺構と遺物	16
(1) 15層上面検出遺構	16
・土坑	16
(2) 14層上面検出遺構	16
・溝	18
・水田駐畔	19
(3) 13層上面検出遺構	20
・土坑	20
・水田駐畔	20
3. 弥生時代後期～古墳時代中期の遺構と遺物	23
(1) 12層上面検出遺構	23
・溝	23
・土坑	28
・溝状遺構	31
(2) 11層上面検出遺構	31
・土坑	31
・土器集中部	32
4. 古代の遺構と遺物	34
(1) 10層上面検出遺構	35
・溝	35
・土坑	37
5. 中世～近代の遺構と遺物	39
(1) 9層上面検出遺構	39
・溝	39
(2) 4層上面検出遺構	42
(3) 2層上面検出遺構	42
第4章 調査のまとめ	43

## 図 目 次

第1章			
図1 周辺遺跡分布図	2	図14 SD 3～8断面図	26
		図15 SD 7 山土遺物	27
		図16 SD 8 出土遺物	28
第2章			
図2 津島地区構内座標と各調査地点	9	図17 SD 9 出土遺物	28
図3 調査区の区割り図	10	図18 SK 3 平・断面図	28
		図19 SK 4 平・断面図	29
		図20 SK 5 平・断面図および 遺物出土状況図	30
第3章			
図4 調査区十層断面図	12	図21 SK 5 出土遺物	30
図5 SK 1 平・断面図	16	図22 SK 6 平・断面図、出土遺物	32
図6 黒色土堆積状況図	16	図23 土器集中部山土遺物	33
図7 14, 15層上面検出遺構全体図	17	図24 11, 12層山土遺物	34
図8 SD 1, 2断面図	18	図25 10層上面検出遺構全体図	36
図9 SK 2 平・断面図	20	図26 SD10～15断面図	38
図10 13層上面検出遺構全体図	21	図27 10層出土遺物	39
図11 13, 14層出土遺物	22	図28 SD16, 17平・断面図	40
図12 11, 12層上面検出遺構全体図	24	図29 7～9層山土遺物実測図	41
図13 SD 5, 6出土遺物	25	図30 2層上面検出遺構全体図	42

## 写真目次

写真1 調査区西壁土層断面	15	写真6 SD 5 底面ピット	24
写真2 14層上面水田跡群	19	写真7 SK 4 断面	29
写真3 13層上面水田跡群	21	写真8 SK 5 断面	29
写真4 13層上面水田跡群	21	写真9 SK 5 遺物出土状況	30
写真5 12層検出構群	24	写真10 SD16底面ピット	40

## 図版目次

- 図版一 古墳時代の遺物（土坑5）  
図版二 古墳時代の遺物（土坑6・土器集中部・包含層）



## 第1章 遺跡の位置と周辺遺跡の概要

津島岡大遺跡は岡山市津島中所在の岡山大学津島地区構内に位置する遺跡の総称である。これまでに第17次調査までが実施され、遺跡の範囲は西北の一部を除いて、ほぼ構内全域にかかるものと推定される。本遺跡の所在する岡山市津島一帯は、中国地方でも最大の平野である岡山平野の北半を占め、主要河川の一つである旭川の西岸にあたる。北側には半田山・ダイミ山・鳥山といった標高150m前後の山塊が連なっている。

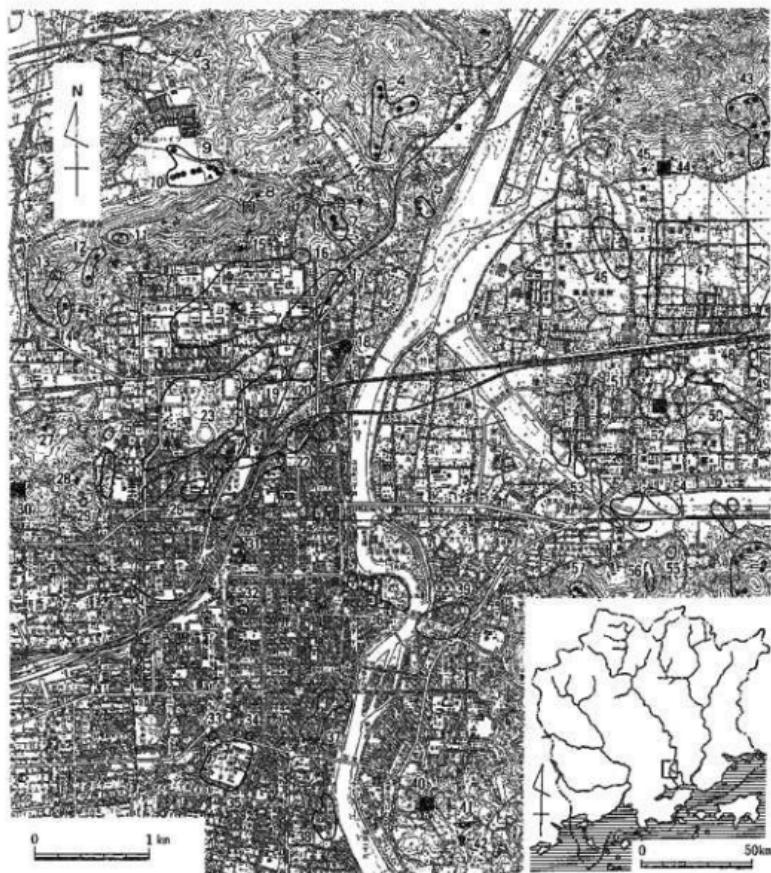
岡山平野は、旭川・吉井川・高梁川の三大河川の沖積作用により形成されたもので、縄文時代の前期頃に海進のピークを迎えると、海岸線は次第に後退し始める。そして河川の堆積作用と氾濫等の繰り返しにより自然堤防と後背湿地とが形成される。本遺跡周辺でも旭川の旧河道や大小様々な規模の支流と、それらの間に形成された自然堤防上の微高地とが複雑に展開する地形となっていた。このような平野の中に形成された微高地に聚落が進出し始めるが、岡山平野で人類の痕跡が認められるのは、今のところ縄文時代中期以前のことである。以後この平野を舞台に、人々の歴史が現代まで連綿と展開していく。ここでは、本報告に関連する時期を中心に本遺跡と周辺遺跡の概要を述べることとする。

本遺跡周辺では、縄文時代中期の明確な遺構の存在は知られていないが、後期にはキャンバスの北東角に隣接する地点に朝夜鼻貝塚の存在が知られる。後期から晩期にかけては、本遺跡内でも第3・5・9・15・17次調査地点等で、貯蔵穴・堅穴住居・炉痕等の遺構や、土器・石器等の遺物がまとめて検出されている。同様の状況は旭川東岸の百間川遺跡群でも認められ、後期・晩期の遺構・中期～晩期の遺物等が検出されている。

縄文時代の終わりに北部九州に稻作農耕が導入され、各地へと伝播していく過程で、瀬戸内地域へはかなり早い段階に情報がもたらされたとみられる。しかし現在、確実な遺構としては、縄文時代晩期にまで遡る例はない。本遺跡周辺において出現期の水田遺構は、弥生時代前期の水田跡である。それらは弥生早期～前期にかけて堆積したと見られる黒褐色粘質土層上面で検出されており、本遺跡第3・5～7・11～17次の各調査地点、洋島江道遺跡、中溝遺跡、北方地蔵遺跡等で確認されている。また国指定史跡である津島遺跡においては、弥生前期前半に微高地で住居・倉庫群、低湿地部分では水田遺構が検出されており、弥生時代前期から微高地の縁辺部において一定の広がりを持った水田經營が行われていた状況が窺えよう。

弥生中期以降も平野部の拡大は続き、農耕技術や水利技術の進歩も相俟って生産基盤が安定したことから、微高地に聚落が次々に出現、発展していく。前出の津島遺跡をはじめ、前期後半から出現する南方遺跡、中期からは絵図遺跡・I:伊福遺跡・鹿田遺跡、後期には天瀬遺跡

道路の位置と周辺遺跡の概要



1. 津島関山遺跡(飛文中期末～)  
 2. 片山古墳(前期)  
 3. 丹原吳遺跡(古代製鉄)  
 4. 前古墳群  
 5. 紗見山遺跡(後期)  
 6. 小動古墳  
 7. 一本松古墳(中期)  
 8. ダニミ山古墳(中期?)  
 9. 沙高丘先臣地内遺跡群  
 (製鉄遺跡含む)  
 10. 佐良池古墳群(後期)  
 11. 幸山山古路(後期)  
 12. 郡山坂塚墓・古墳群  
 13. 烏山古跡(或図?)  
 14. 七つ丸古墳群(前朝)
15. お城(櫛)大塚(中期)  
 16. 阿須賀貝塚(飛文～中期)  
 17. 法久江遺跡群  
 18. 神宮寺山古墳(前朝)  
 19. 中野遺跡(後半～)  
 20. 北万葉遺跡群(佐生～)  
 21. 仙崎古墳(奈半利)  
 22. 田所遺跡(第4)  
 23. 洋舟古墳  
 24. 芦原遺跡(佐生～)  
 25. 上伊福西古墳(弥生)  
 26. 仲宿九引口遺跡  
 27. 青柳古墳(前朝)  
 28. 深谷古墳(前朝)  
 29. 林林寺遺跡(弥生)
30. 行井施寺(奈良～中世)  
 31-34. 放布地(弥生)  
 35. 鹿田遺跡(佐生～中世末)  
 36. 間山城(夷隅～江戸)  
 37. 大瀬遺跡(分水)  
 38. 二日市遺跡(弥生～近世)  
 39. 古京遺跡(弥生～中期)  
 40. 鮎川龍寺(奈良～平安)  
 41. 鮎川吉白山古墳(前朝)  
 42. 鯨山109号墳(後期)  
 43. 流沿古墳群(前朝)  
 44. 寶印癡寺、慈勝  
 (白鳥～奈良)  
 45. 唐人塚古墳  
 46. 須磨園山跡(古代～中世)
47. 須磨園府辦定地  
 48. 雄町遺跡  
 49. 乙多兄足跡(弥生)  
 50. 須田家塚跡(弥生)  
 51. 本印西古跡(佐生～古墳)  
 52. 鮎多神社(佐生～中世)  
 53. 百間川原尾山遺跡  
 (飛文中期末)  
 54. 丹胡川穴出道路  
 (飛文中期末)  
 55. 鮎山219号古跡(田石墓)  
 56. 明神寺城跡(明治)  
 57. 鮎山古跡(後期)

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

というように、集落遺跡の増加が認められる。

一方、岡山平野の北側の半田山山塊には、弥生時代中期～古墳時代後期にかけて、有力な首長系譜をたどれる弥生墳丘墓・前方後円墳・前方後方墳等が相次いで築かれる。すなわち都月坂2号墳<sup>(3)</sup>・1号前方後方墳<sup>(3)</sup>・七つ塚古墳群<sup>(3)</sup>、ダイミ山古墳<sup>(7)</sup>、一本松古墳<sup>(7)</sup>、さらに麓部にはお塚(様)古墳<sup>(9)</sup>が所在している。またやや東に離れた平野の中に神宮寺山古墳<sup>(10)</sup>が築かれている。これらの墳墓の造営に関わった人々と、本遺跡周辺で検出されている遺構群とは密接な関わりを想定できる。例えば弥生時代後期では本遺跡第3・15次調査地点で水田遺構、第10次調査地点の土坑・ピット群、第12・13次地点の多数の溝群が、また古墳時代に入ると、第5・6・9次調査地点で水田遺構、第10次調査地点の井戸等がそれぞれ検出されている。

次いで古墳時代後期に入ると、周辺での造墓活動は見られなくなるが、本遺跡では第6・7次調査地点で水田遺構、第10次調査地点で堅穴住居址が検出されており、該期の集落構造を知る手がかりが少しづつではあるが増加している。この時期、岡山平野で遺跡の活発な動向をたどるのは旭川の東岸地域で、百間川遺跡群<sup>(3)</sup>・湯迫古墳群・操山古墳群等が知られている。

古代においては、岡山平野でも条里制が施行されるが、発掘された遺構例は多くはない。本遺跡では第3・6・7・12次調査地点において、東西南北の方位に合致する水田跡や東西方向の大溝、中溝遺跡<sup>(11)</sup>・南方金田遺跡<sup>(12)</sup>でも条里関連の遺構の検出が認められる。また津島江道遺跡では、古代の倉庫群・建物群が発見され、御野郡衙に隣接する施設との想定がなされている。一方、岡山平野南半では、古代から中世にかけていくつかの莊園の存在が知られ、鹿田遺跡<sup>(13)</sup>では建物群・井戸等の遺構の検出から、撰閑家殿下被領「鹿田莊」比定地とされる。この時期には平野の南半でも開闢が一層進んだことが窺える。

中世には耕地造成により、岡山平野北半ではそれまで僅かながら残っていた微地形が消え、平野一面に水田が広がったものと推定される。本遺跡でも水田開運遺構が検出されており、また旭川西岸の鹿田遺跡・二日市遺跡<sup>(14)</sup>・東岸の百間川遺跡群等が該期の集落遺跡として知られている。近世、特に16世紀以降は、児島湾の干拓が進んで急速に陸化した。岡山平野の水田化はさらに進み、そのなかで本遺跡周辺では御野郡一帯が岡山藩の穀倉地帯となっていたことが知られている。しかし1907～1908年に御野郡御野村・伊島村に旧陸軍屯営用地が造成され、旧陸軍による造成と、用地利用の痕跡は岡山大学津島地区構内にも随所に認められる。さらに近年の急速な市街化によって、かつての田園風景は一変し、現在に至っている。

註

- 1 津島同大遺跡の発掘調査は1996年度までに第17次調査まで実施されている。以下、本文中の各調査地点の引用・参考文献は表1に掲げた通りである。
- 2 鎌木義昌・亀田修一「朝夜具塚」『岡山県史 考古資料』 1996
- 3 岡山県教育委員会編『百間川浜田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 1985
- 4 本遺跡に隣接する津島江道遺跡では弥生早期に遡る可能性が指摘されている、水田跡が検出されている。「津島江道遺跡」『日本における稻作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988
- 5 計4
- 6 岡田博「都市計画道路万成・国富線建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告25』 1995
- 7 宮野義治「都市計画道路万成・國富線建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告26』 1996
- 8 近藤義郎「津島遺跡」『岡山県史 考古資料』 1986  
岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』 1970
- 9 a 岡山市遺跡調査団『南方遺跡発掘調査概報』 1971  
b 岡山市遺跡調査団『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告』 1981  
c 岡山県教育委員会『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40 1981  
d 岡山県古代占代文化財センター編『陰陽遺跡・南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110 1996
- 10 計9d
- 11 中野雅美「上伊福(ノートルダム清心女子大学構内)遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告14』 1984  
中野雅美・根木修「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』 1986
- 12 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編『鹿山遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 1988
- 13 出宮徳尚「大瀬遺跡」『岡山原史 考古資料』 1986
- 14 近藤義郎「郡刀板二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』 1986
- 15 近藤義郎「郡刀板一号墳」同上
- 16 七つ塙古墳群発掘調査団編『七つ塙古墳群』 1987
- 17 近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史 考古資料』 1986
- 18 近藤義郎「岡山市津島の俗称「おつか」と考する前方後円墳についての調査の概略報告」「古代古墳」10集 1988
- 19 鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山県史 考古資料』 1986
- 20 岡山県古代占代文化財センター編『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 1994  
同上「百間川原尾島遺跡4」同上97 1995
- 21 「中瀬遺跡」『日本における稻作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会ほか 1988
- 22 「南方畠田遺跡」『日本における稻作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会ほか 1988
- 23 高畠知功「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告18』 1988
- 24 計12及び岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『鹿田遺跡II』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 1990  
同上「鹿田遺跡3」同上第6冊 1993
- 25 計12及び岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 1997
- 26 出宮徳尚「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報35』 1985
- 27 計20及び百間川米田(当麻)遺跡・原尾島遺跡ほか  
岡山県教育委員会編『百間川長谷遺跡・当麻遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46 1981  
同上「百間川当麻遺跡2」同上52 1989  
岡山県古代占代文化財センター編『百間川原尾島遺跡3』同上74 1989  
岡山県教育委員会編『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 1984  
同上「百間川原尾島遺跡5」同上106 1996

表1 津島岡大遺跡文献一覧

	調査次	書名【概報】	発行年
a	1次	岡山大学津島北地区小柄法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 (岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集)	1985
b	2次	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅰ(廣字部構内BH13区他) (岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊)	1986
c	3次	津島岡大遺跡3(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊)	1992
d	4次	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1987
e	5次	津島岡大遺跡4(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊)	1994
f	6・7次	津島岡大遺跡6(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊)	1995
g	8次	津島岡大遺跡5(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊)	1995
h	9次	【岡山大学構内遺跡調査研究年報10】 津島岡大遺跡9(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊)	1993 (1998刊行予定)
i	10次	【岡山大学構内遺跡調査研究年報10】 【同】	1993 1994
j	11次	津島岡大遺跡7(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊)	1995
k	12次	【岡山大学構内遺跡調査研究年報12】	1995
l	13次	津島岡大遺跡8(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊)	1997
m	14次	(本報告書)	
n	15次	【岡山大学構内遺跡調査研究年報13】	1996
o	16次	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1997
p	17次	【岡山大学構内遺跡調査研究年報14】	1997

\*編集はa・b・dについては岡山大学埋蔵文化財調査室、そのほかは岡山大学埋蔵文化財調査研究センターによる。なお【】で示したものは概報である。

## 第2章 調査経過

### I. 調査に至る経過

岡山大学津島地区では1982年度の津島岡大遺跡第1次調査が実施されて以来、発掘調査が継続され、1994年10月までに第13次調査が終了している。これまでの調査成果から、縄文後期の遺構・遺物、弥生時代前期以降、近代に至るまでの水田関連遺構が本地区の広範囲にわたって広がることが判明している。

そうした中で1994年度には福利厚生施設棟の建築計画が具体化した。津島北地区・南地区的同時着工計画が提示され、附属図書館の東隣に北棟、学生会館の北側に南棟の建設が予定された。北棟予定地については、1990年度に試掘調査、1994～1995年度に発掘調査を実施し、その成果が報告されている。<sup>(1)</sup>一方南棟予定地については、1995年度の建設設計計画の決定時点で、試掘調査を実施せず発掘調査に入ることとなった。それは予定地内の埋蔵文化財の状況が、50m東の地点で1992～1993年度に実施した第10次調査（保健管理センター）及び、周囲で行った立会調査の成果から把握できると判断したためである。第10次調査では弥生時代後期初頭、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後半の各時期の遺構・遺物が街に検出された。<sup>(2)</sup>特に井戸・住居・土坑群は、津島岡大遺跡においては初めての居住域に関わる遺構として注目できる。第14次調査も同様の成果があるものと判断し、1995年10月25日に調査を開始した。

### 2. 調査組織

#### 管理委員会委員

小坂二度見（学...長）	神立 春樹（文化科学研究科長）
T.藤進忠郎（文学部長）	中村怜之輔（自然科学研究科長）
木原 孝博（教育学部長）	青山 煦（資源生物科学研究所長）
早瀬 武（法学部長）	岡部 喬（附属図書館長）
藤本 利射（経済学部長）	折田 薫三（医学部附属病院長）
岩見 基弘（理学部長）	村山 洋二（歯学部附属病院長）
松尾 信彦（医学部長）	久城 育夫（固体地球センター長）
中井 宏之（衛生学部長）	遠藤 浩（医療技術短期大学部長）
篠田 純男（薬学部長）	伊澤 秀而（学生部長）
中島 利勝（工学部長）	新井 邦隆（事務局長）

千葉 喬三（農学部長）

稻田 孝司（埋蔵文化財調査研究センター長）

河野伊一郎（環境理工学部長）

## 幹事

新屋 秀幸（庶務部長）

池本 洋一（経理部長）

井内 敏雄（施設部長）

## 運営委員会委員

稻田 孝司（文学部教授、センター長） 村上 宅郎（医学部教授）

狩野 久（文学部教授） 千葉 喬三（農学部教授、調査研究専門委員）

高重 進（教育学部教授）

井内 敏雄（施設部長）

建部 和広（経済学部教授）

新納 泉（文学部助教授、調査研究室長）

## 調査主体

小坂二度見　岡山大学学長

## 調査総括

稻田 孝司　埋蔵文化財調査研究センター長（文学部教授）

## 調査員

岩崎 志保　埋蔵文化財調査研究センター調査研究員（文学部助手）

横田 美香　"　(　"　)

## 3. 調査の方法と経過

発掘調査は1995年10月25日から開始した。1907～1908年の陸軍駐屯地建設に伴う造成土を中心とした1層を機械により除去した後、2層以下は手掘りにより調査を進めた。1層除去の段階で、現代のゴミ廐棄坑が數ヶ所に存在することが判明した。そのうち規模の大きなものは基盤層まで破壊が及んでおり、結果的に調査区のはば1/4は既に破壊された状況であった。

2層以下、各層の上面でそれぞれ遺構検出を行い、2・4・9層でそれぞれ歓・耕作痕を確認した。13・14層上面では弥生時代の水田跡を検出した。跡の検出にあたっては、水田面と判断される面から数センチ上まで掘り下げ、以下を徐々に精査し、断面でおさえられるのを取り上げるようにした。基盤層（15層）上面で最終の遺構検出を行った後、数ヶ所で深掘りを行い、土層堆積状況を記録し、全調査を終了した。

調査終了は当初1996年3月を予定していたが、基盤層にまで達する現代のゴミ廐棄坑が調査区の1/4を占めることが明らかになり、当初計画よりも調査期間を短縮することとなった。調査は1996年2月14日に終了した。調査面積は856m<sup>2</sup>、期間は1995年10月25日～1996年2月14日である。調査は常時2名が担当した。

#### 4. 調査の概要

主要な成果としては弥生時代前期の水田跡群、古墳時代前半の溝群を含む遺構・遺物の検出が挙げられる。以下に成果を概述する。

**縄文時代の遺構** 土坑1基を検出した。検出した遺構は1基のみで、縄文時代の遺構は極めて希薄と言える。遺物では調査区の北東部で縄文土器の破片が少量出土している。

**弥生～古墳時代の遺構** 弥生前期の遺構としては、水田跡群2面、土坑1基、溝2条を検出した。上層の跡群は洪水砂に覆われ、南北方向には良好な状態で残っていた。東西方向には僅かにしか確認できなかった。下層の水田跡群はいわゆる「黒色土」上に形成されている。小区画の跡群が地形の傾斜に沿うように形成されていた。出土遺物は極めて少ないが、弥生時代前期頃に比定される。2条の溝はほぼ南北方向に併行して作られている。遺物はほとんど出土していないが、埋土や基本土層との関係から、弥生前期に属するものと考えられる。古墳時代初頭頃と考えられる遺構は、溝8条、土坑3基、耕作痕である。溝は古代と同様に北東～南西方に7条、北西～南東方向に溝状遺構1条を検出した。これらの溝群は弥生時代後期～古墳時代初頭頃の遺物を比較的多く出土した。溝は近接した時期に繰りかえし掘られたものと考えられる。底面にビット列と土坑1基を検出した溝も存在した。溝群を境に東西で土地利用形態が異なっていたものと考えられ、西側では南北方向の耕作痕を一部で確認した。一方東側には微高地部分が広がる。古墳時代前半期の遺構としては土坑1基を検出した。土坑は調査区南東の地形の高い部分に位置している。この一帯は調査区の東方、津島岡大遺跡第10次調査地点（保健管理センター）と同様の微高地を呈している。この微高地部分は弥生前期以降の水田化以降、近代まで耕地造成を免れてきており、長期間にわたって高所として残ってきたものと考えられる。

**古代の遺構** 古代の遺構としては、溝6条、土坑2基を検出した。溝は北東～南西方向に5条、これに直行するもの1条がある。溝の重複・切り合いが認められるが、時期は川土遺物から古代と判断した。

**中世の遺構** 中世の遺構としては、溝2条と耕作痕を検出した。2条の溝は隣接して形成されており、ほぼ東西方向に走っている。耕作痕も同じく東西方向に認められた。

**近世の遺構** 近世の遺構としては、東西方向の耕作痕を検出した。他には近世期の耕作土と判断される土層を確認しているが、遺構は見つからなかった。

**近代の遺構** 明治期に属する遺構としては、畑の畝・道状遺構・溝を検出した。東西方向の2条の溝を境に北側では南北方向、南側では東西方向の畝面を検出した。

## 5. 調査区の位置と区割り

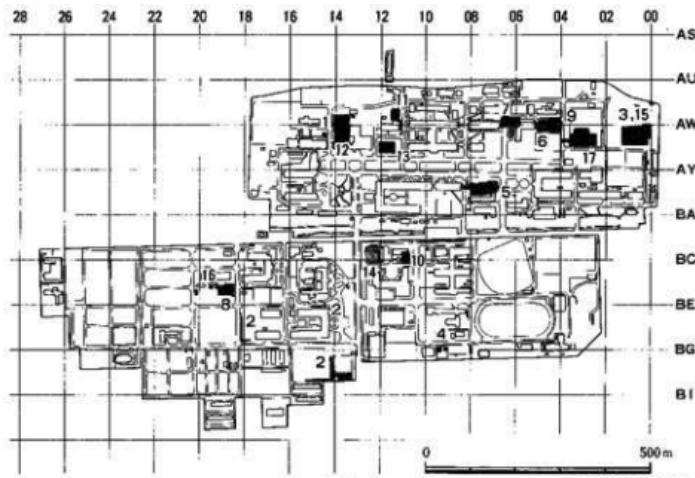
### a. 位 置

津島岡大遺跡は、岡山大学の津島キャンパス内の遺跡群の総称であり、岡山市の旧市街地北側に位置する（図1）。本調査区はその中でも津島南区に位置し、北側に市道（通称東西道路）、西側に通称南北道路が走る。調査地点は旧共済会館の西に隣接しており、調査以前には長い期間、空き地となっていた。

周辺部では、1992～1993年度に保健管理センターの新宮に伴って津島岡大遺跡第10次調査を実施している。本調査地点は第10次調査地点から50m西の位置にあたる（図2）。

### b. 構内座標の設定

岡山大学津島地区構内には、真北方向に軸を合わせた構内座標を設定している。原点は半田山山塊の一部が大学の敷地に含まれるため、キャンパスから約900m北に置き、構内全域を覆っ



- |                |                  |                          |
|----------------|------------------|--------------------------|
| 1. 小構法目標       | 7. 工学部情報工学科棟     | 13. 福利厚生施設北棟             |
| 2. 農学部構内       | 8. 進化了実験施設       | 14. 福利厚生施設南棟(本調査地点)      |
| 3. 男子学生寮       | 9. 工作物生態機能応用工学科棟 | 15. サテライトベンチャービジネスラボラトリー |
| 4. 周内運動場       | 10. 保健管理センター     | 16. 動物実験施設               |
| 5. 大学院自然科学研究科棟 | 11. 情報処理センター     | 17. 環境理工学部               |
| 6. 工学部生物応用工学科棟 | 12. 附属図書館        |                          |

図2 津島地区構内座標と各調査地点 (縮尺1/12,000)

## 調査経過

ている。その起点となるのは、国土地理院第V座標系の南北軸座標値（X=-144,500m）と東西軸座標値（Y=-37,000m）の交点である。

軸方向の設定は、本地区の全体的な敷地割りの方向が、岡山市街地中央部において認められる正方位の条里地割りと一致し、ほぼ東西南北の方向に合致していることから、真北に合わせている。そして、原点から一辺50mの間隔で、東西方向と南北方向に方形の区切りを行い、南北軸は北から南に向かって、AA線からBI線へ、東西軸は東から西に向かって、00線から48線へとして、それによって囲まれる50m四方の一区画は、東北角で交わる二方向の線名を組み合わせて、AA00区というように呼称する（図2）。

この区画表記によって、構内遺跡内での調査地点を把握し、調査・記録を行っている。

### c. 調査区の区割り

本調査区は前述の構内座標による地区割りの中ではBCラインと12ラインが通り、地区としてはBB12区、BC12区にまたがる。調査にあたっては、東西約20m、南北40mの調査区に対して構内座標による50m四方の区切りでは大きすぎ、調査及び記録の便宜を図るために、5m四方の区画を設定した（図3）。各区画は東西方に東から12-00～90線、南北方向には北からBC-0～9線というように細分し、それによって囲まれる一区画のは東北角で交わる二方向の線名を合計して、BB12-05区、BC12-51区などというように呼称する。ちなみに構内座標の12ラインが調査区内の12-00ラインに、同じくBCラインがBC-0ラインに対応している。本書内で遺構の位置等を表示する場合には、原則としてこの調査区内用の区割りを用いる。

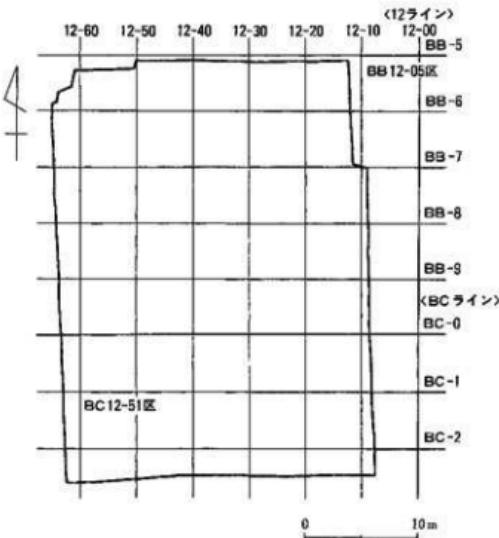


図3 調査区の区割り図 (縮尺1/500)

## 註

- 1 本書第1章表1-1文献
- 2 同 i文献

## 第3章 調査の成果

### 1. 層序と地形

本調査区では、土層の堆積状況を周囲の壁面と調査区中央に十字に設定した土手の観察によって確認した。ここでは、地形復元のために有効なデータの得られた調査区南壁と西壁の観察結果から、土層堆積状況を概略していく。あわせて、地形と土地利用の変遷についてもまとめていくことにする。

#### a. 層序(図4、写真1)

1層：本層は1907～1908年の山陸軍屯营地建設にともなう造成土である。層厚は調査区南東部で0.6m、その他の部分では1.0～1.2mである。現地表は標高4.2～4.6m（以下高さはすべて標高）である。

2層・3層：明治期の耕作土である。2層は青灰色の砂質土層で、5mm前後の砂礫を多く含む。調査区の南辺では、2層と3層のさかいが不明瞭であり、土質・色調とも3層に似る。上面は3.5m前後で、ほぼ水平である。2層上面で検出した歯のはしの方向が変化するBB-8ライン付近では、15cm程度の段差が認められ、南半のほうが若干高くなる。3層は淡青灰色粘質土である。2層と同様にBB-8ライン付近で30cm程度の段差が存在する。南半部のほうが高く、上面の高さは3.5m前後、北半では3.2～3.3mを測る。調査区北半部では、明治期に中世層にまで達する削平があったようで、7層直上に3層が堆積している部分が存在する。

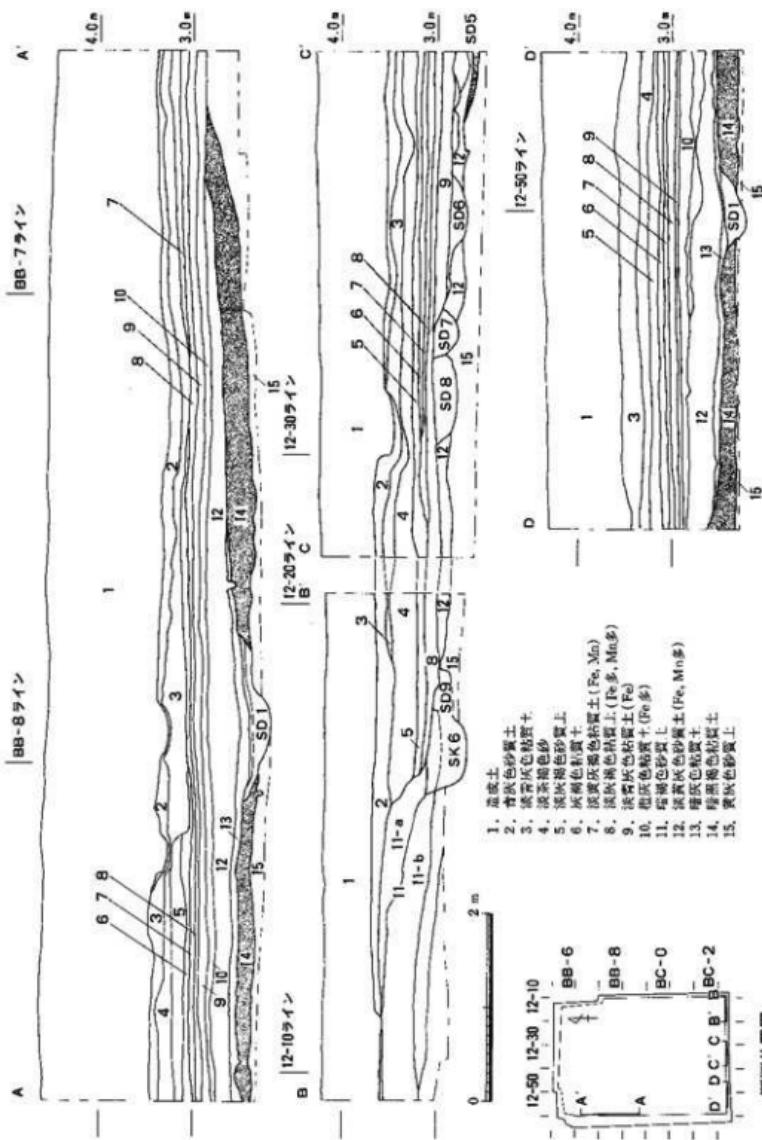
4層：淡茶灰色砂層である。近世の洪水砂と考えられる土層である。色調の差によって二層に分層できる部分もあるが、必ずしも明瞭でない。上面は3.3～3.4mで、ほぼ水平である。調査区の北半部では、明治期に削平されたようで残存しない。上面では、耕作痕と思われる浅い溝を数条検出している。

5層：淡灰褐色砂質土層で、細砂を非常に多く含み、軟弱な土質である。近世の耕作土と考えられる。上面は3.2～3.3m前後である。4層と同様に、明治期の削平のため調査区北半部では残存していない。

6層：やや粘質のある淡灰褐色土である。上面でのレベルは3.15～3.2mである。層厚は概ね10cm前後であるが、旧地形が若干高くなる調査区北辺部では4、5cm程度と薄くなる。本層の時期は、出土した土器から中世末頃と推定できる。

7層：淡黄灰褐色粘質土層で、鉄分とマンガンの沈着が認められる。調査区の南東部分では、

調査の成果



砂質が強くなる。上面でのレベルは3.1~3.2mをはかる。層厚は厚い部分で10cm程度であるが、人半は5cm前後と薄い。13世紀から14世紀と15世紀頃の土器片が少量出土している。出土遺物には時期幅があり層厚も薄いため、新しい時期の遺物は上層からの混入品の可能性も考えられるが、15世紀代の遺物が本層の時期を示すと考えてよからう。本層の帰属時期は概ね中世後半頃と考えられる。

8層：淡灰褐色の粘質土で、色調・土質は上層の7層に似る。鉄分とマンガンの沈着が著しい十層である。鉄分は主に本層の上面に沈着している。また、南東にいくにしたがって砂質が増し、色調がやや赤味を帯びていく。上面でのレベルは3.05~3.1mである。層厚は7cm前後と比較的薄い。古墳時代の土師器や須恵器をはじめ13世紀から14世紀頃の土器、15世紀代の備前焼の破片が出土している。出土遺物から、本層の帰属時期は15世紀頃と考えられる。上層の7層とは時期的に大きなひらきがないようである。8層は中世前半期の土層を削平して、15世紀代に造成によって形成された層であろう。

9層：粘性の強い灰色の土層である。上面では鉄分の沈着が認められた。層厚は5~10cm程度である。調査区南東部分では次第に層厚が薄くなっている、南壁12-10ライン以東、東壁BB-9ライン以南では堆積を確認できなかった。上面でのレベルは3.0~3.1mで、東にいくにしたがって若干高くなる。上面では、調査区北辺で東西方向にはし溝を2条検出した。本層を掘り下げる際に、古墳時代前半頃の土師器、古墳時代の須恵器をはじめ古代の須恵器、中世前半期の土師器碗が出土した。以上の状況から、9層は中世の前半期に、古墳時代から古代にかけての上層を削平して形成されたものと推測される。

10層：棕灰色の粘質土で、鉄分の沈着が顕著である。上面は2.9~3.0mである。層厚は10~15cmであるが、調査区南東隅では認められない。上面では、溝6条と土坑2基を検出している。遺物としては、古墳時代初頭の土師器が多量に出土しているのをはじめ、6、7世紀代の須恵器、古代前半（8世紀頃）の須恵器・土師器が出土している。こうした点から、本層は8世紀頃に、古墳時代初頭および後期の層を削平して形成されたことが窺える。

11層：2層に分層される。上層は暗褐色の若干粘りのある砂質土層である（11-a層）。下層は砂質が強まり、土色も暗褐褐色になる（11-b層）。11層は調査区の南東隅にのみ認められる。本層は近代の耕作土（2層）直下で認められており、上面は近代までそれほど大きな削平や造成を受けることなく残存したようである。調査区南壁の觀察から、低位部に堆積した11層は、10層堆積時に削平され、以後削平と造成の連続によって徐々に削りとられていったことが分かる。遺物としては、11-b層で弥生後半と古墳初頭と古墳前期後半頃の土師器が多量に出土している。11-b層は、古墳時代初頭の層を破壊して、古墳時代前期後半頃に形成されたものと考えられる。また、11-a層も古墳時代初頭と前期後半頃の土器を多く含んでおり、土器も

## 調査の成果

11—b層から出土するものとほぼ同時期のものである。また11—b層上面では土坑を1基検出したが、埋上が11—a層と似る。この土坑(SK6)が形成されてからさほど時間が経過しないうちに、11—a層が急速に堆積したものと考えられる。11—a層は堆積状況や遺物の出土状況から周辺からの流入土と考えられる。したがってSK6の本来の遺構面は11—b層にあった可能性が高い。

12層：淡黄灰色のしまりの弱い砂質土層である。マンガンを多く含み、鉄分の沈着も認められる。調査区の南東部に向かって砂質が強くなり、マンガンの量が増加する。調査区の北西部では堆積が認められなかった。また、調査区西半部では、下方に行くにしたがって砂質が強くなり色調も暗く、マンガン・鉄分の量が減少する。上面でのレベルは2.7～3.2mであり、調査区南東部で高くなる。層厚は10～40cmである。上面では溝7条、溝状遺構1条、土坑3基を検出している。弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が多く出土している。こうしたことから、本層は弥生時代後期の層を破壊して、古墳時代初頭頃に造成されたものと捉えられる。したがって本層の帰属時期は、古墳時代初頭頃と考えられる。

13層：暗灰色粘質土層である。調査区の南東部と北西部には堆積が認められなかった。上面は2.45～2.65mである。層厚は5～7cm程度で比較的薄い。上面では、水田跡と土坑1基を検出している。出土遺物は弥生時代前期の土器片が少量であり、これらが本層の帰属時期を示すものであろう。

14層：暗黒褐色の粘質の強い土層である。津島地区一帯にみられるいわゆる「黒色土」に相当する。基盤層(15層)のレベルが高い調査区の北西部と南東部では堆積が認められない。また、この高位部分に向かって次第に色調が薄くなり砂質化し、マンガンの沈着が顕著に認められるようになり15層との境界が不明瞭になっていく。高位部のマンガンの多い部分では、色調が暗紫褐色を呈する。上面でのレベルは2.4～2.65mである。上面では、小区画の水田跡と溝を2条検出している。出土遺物は少なく、弥生早期の土器と弥生時代前期の土器が見つかっている。遺物の状況や構内遺跡の他地点の状況から、本層は弥生早期から前期にかけて形成されたと考えられる。

15層：黄灰褐色の砂質土層で、基盤層である。上面でのレベルは、2.35～3.3mである。調査区の南東部分では11層直下に、また北西部では12層直下に15層が認められる。また、北西部では、一部で礫層が確認された。上面で検出した遺構は、土坑1基のみである。遺物は縄文時代後期の土器の小片が数点と縄文中期末頭の土器片が1点出土したのみである。構内遺跡の他地点の調査成績から、本層の帰属時期は縄文時代後期と推定できる。また、縄文時代中期末の土器片は、この付近でも当該期に何らかの人の活動があったことを示すものであろう。

## b. 地形

縄文時代後期以前〈15層〉：調査区の南東部は、第10次調査地点（保健管理センター）一帯に広がる微高地の端にあたると考えられる。一方で北西部分では、標高約2.7m付近で基盤層と判断される礫層を確認した。本調査区北西に位置する西門付近で谷地形を確認しており、礫層はこの堆積作用によって形成された自然堤防上の微高地と考えられる。調査区の大半は、この両微高地に挟まれた浅い谷状の部分にあたる。谷部分は幅10～15m以上で、概ね北東—南西方向にのびる。微高地と谷状部分の比高差は約80cmである。

弥生～古墳時代〈14～11層〉：前段階で形成された地形の中で、谷状の部分に有機物を多く含む黒色土層（14層）が堆積する。12層堆積時に、調査区北西部では微高地と谷部分との比高差がやや解消される。古墳時代中期頃に、11層が造成されるようであるが、後世の削平のため、調査区南東部の高所部分のみに残されるようである。

古代以降〈10～2層〉：10層以降は、ほぼ水平堆積である。古代以降は、水田等の耕地獲得のため、各時期造成が行われたと考えられる。調査区南東部微高地と他の部分の比高差が概ね解消されるのは、近代（2、3層）になってである。この微高地部分には、古墳時代層（11層）の直上に近代層（2層）が堆積するということになる。

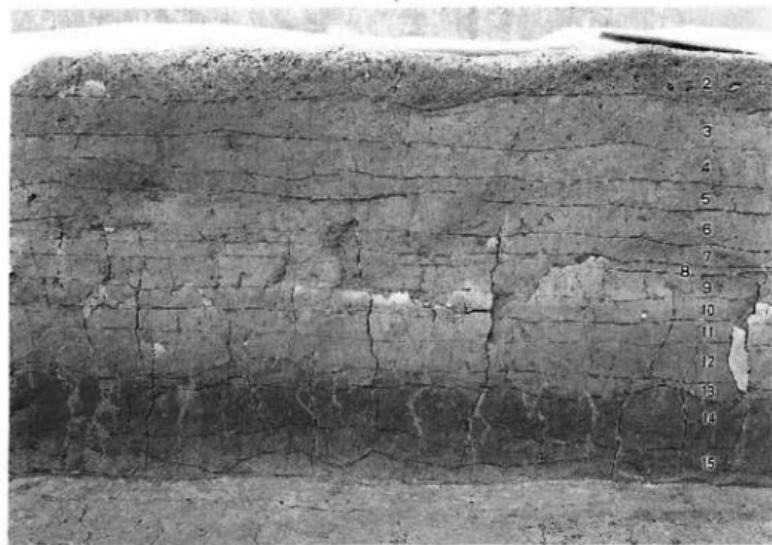


写真1 調査区西壁土層断面（東から）

## 2. 繩文時代後期・弥生時代前期の遺構と遺物

### (1) 15層上面検出遺構

#### ・土坑

##### SK1 (図5・7)

調査区中央東よりのBC12-29区に位置している。検出レベルは標高2.4mである。平面形は、径0.6m前後のいびつな円形である。底面は標高2.1m前後のところに位置しており、深さ0.3mを測る。埋土は大きく3つに分層できる。1層が褐色系の砂質土である。2、3層は灰色系の砂質土であるが、2層中には炭や焼土が認められ、また3層中には粗砂が多く、両層は明確に区別できる。

遺物は全く出土していないが、遺構の形成時期は基本層序と遺構内埋土の状況から、15層（縄文後期）堆積以降で14層（弥生早期～前期）堆積以前となるであろう。詳細な時期は決めがたいが、縄文時代後期におさまると考えられる。

### (2) 14層上面検出遺構

津島岡大遺跡周辺の地形は、縄文時代中期後半から後期頃に形成される。本調査地点での地形は、北西と南東部分に微高地があり、その間は浅く狭い谷地形を示すものである。弥生早期～前期に形成される黒色土（14層）は、この谷状の部分に堆積する。弥生前期の水田は、黒色土が地盤した部分に形成されるようである（図6）。

この時期に属るのは、14層上面で検出した溝2条と水田畦畔1面、13層上面で検出した土坑1基と水田畦畔1面である。

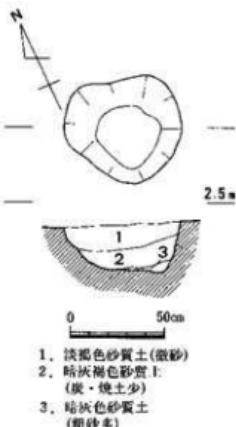


図5 SK1平・断面図 (縮尺1/30)

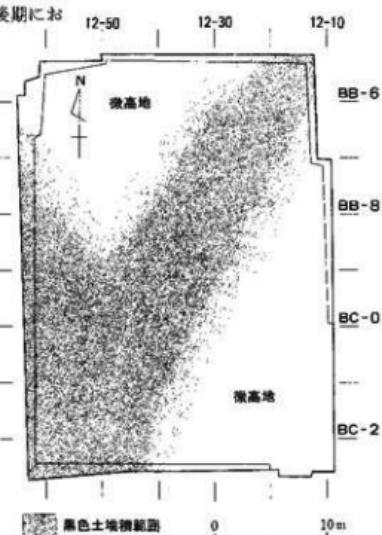


図6 黒色土堆積状況図 (縮尺1/500)

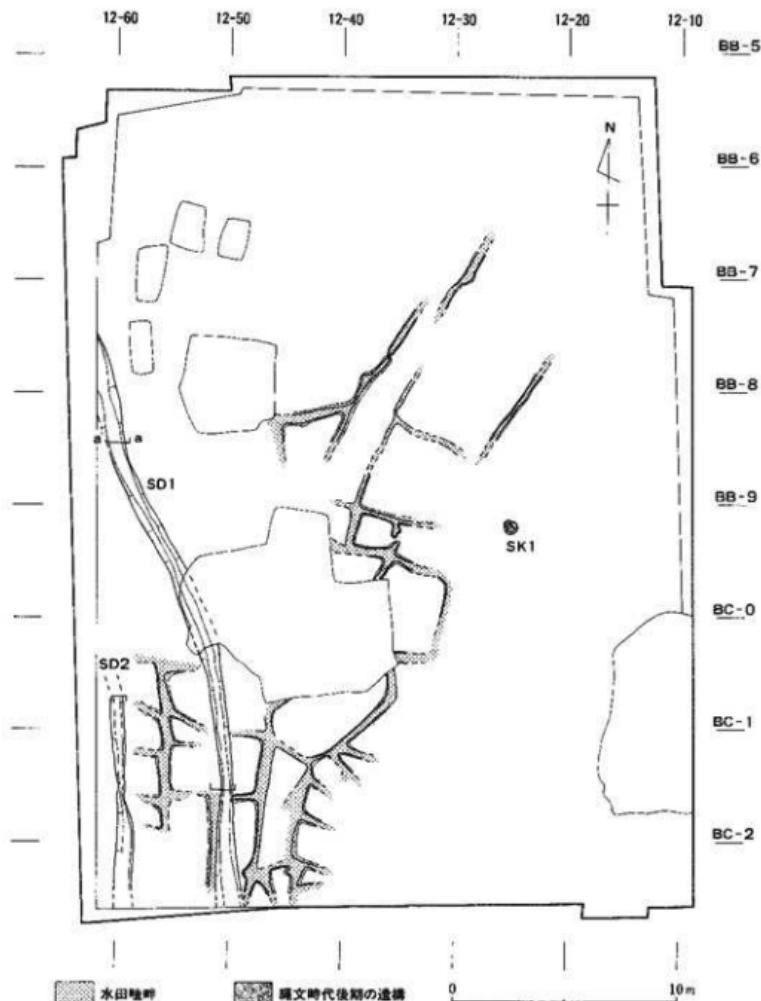


図7 14, 15層上面検出遺構全体図 (縮尺1/250)

## 調査の成果

### ・溝

#### SD 1 (図7・8)

調査区西部のBB12-67区からBC12-42区にかけて検出した。北西—南東方向から、BC12-50区付近以南ではほぼ南北方向に方位をとる。検出レベルは標高2.4~2.65m付近である。後述する水田畦畔を切って形成されている。溝は幅約50~100cm、深さ25~45cmを測る。底面のレベルは標高2.1~2.2mに位置しているが、北から南に向かって若干低くなる傾向が認められた。埋土は、上半部に堆積する褐色系の粘質土と下半部の黒褐色粘質土との大きく2層に分かれる。黒褐色の粘質土は14層と色調や土質が近似している。

遺物は十器の細片が出土したのみで、遺構の時期を特定できるものはなかった。畦畔を切って形成されており、これよりは新しく、また13層堆積以前には埋没している。こうした点から、弥生時代前期と考えられる。

#### SD 2 (図7・8)

調査区南西部分で、土層観察用の土手を除去している最中に検出した。そのため、上面は若干削平されている可能性もある。溝はほぼ南北方向に走ると考えられるが、BC-0ライン以北では調査区外にあたるため検出できなかった。検出レベルは2.5m前後である。残存状況の良好な部分で幅約50cm、深さは30cmを測る。溝の検出面は、SD 1と同じく14層上面である。埋土は二つに分かれる。上層は鉄分の沈着した灰褐色の砂質土、下層は色調が14層と似た黒褐色の砂質土である。

遺物は全く出土していないが、流路の方向や埋土状況が類似しており、SD 1とはほぼ同時期で弥生前期ものと考えられる。

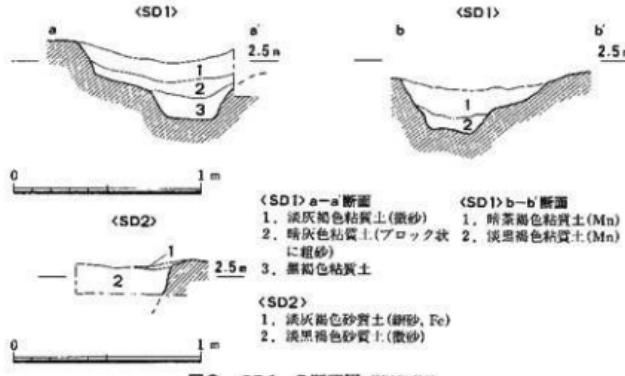


図8 SD1, 2断面図 (縮尺1/30)

• 水田畦畔

水田畦畔は、14層（黒色土）の堆積が認められた部分でのみ検出できた（図7、写真2）。検出されなかった部分は、畦畔が存在していたが上層の耕作の際に削平されたか、あるいは本来的に存在していなかったという二通りの可能性が考えられる。基本層序でも述べたように、14層は微高地に向かって次第に土質を変えていく。この点から、本来的には弥生前期に14層が微高地上には形成されなかったものと考えられる。換言すれば、本調査地点では、微高地上ではなく狭い谷地形の部分を選んで水田が作られたといえるかもしれない。

水田畦畔の検出レベルは2.5~2.65mである。畦畔は地形に沿って、北東一南北方向と東西方向に作られている。一区画全体が検出された水田は少ないが、畦畔は一辺2~4m、面積約5~15m<sup>2</sup>程度の小区画水田である。畦畔は、東西方向よりも南北方向のものの方が連續して作られている。南北方向の畦畔が、主要畦畔になると考えられる。畦畔の高さは2、3cm足らずでしか残っておらず、残存状況は良好とは言いがたかった。それでもBB12-39区とBB12-37区では水口を検出している。

従前の調査成果から、14層（黒色土）は弥生早期～前期に属することが明らかになっている。水田畦畔の帰属時期は弥生前期と考えられる。



写真2 14層上面水田畦畔（北から）

## (3) 13層上面検出遺構

## ・土坑

## SK2 (図9・10)

調査区西側中央付近のBC12-59区で検出した。検出レベルは標高2.5~2.6mである。平面形はいびつな円形で、直径45cmを測る。深さは20cmある。底面と側面は緩やかな弧状をしており、断面は半円形になる。埋土は灰色系の砂質土を主体とする。遺物は川土していないが、遺構の所属時期は、13層堆積以降すなわち弥生前期以降である。

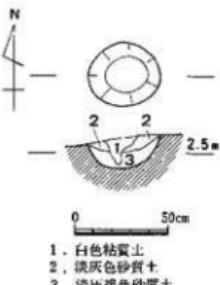


図9 SK2 平・断面図 (縮尺1/30)

## ・水田畦畔

調査区の西半部で検出した(図10、写真3・4)。検出レベルは、2.65~2.7m付近である。畦畔は本来的には、調査区の西側にも広がりがあり、調査区内で検出した部分が畦畔の東端部にあたると推定される。畦畔は高さ5~7cm前後残存している。残存状況は14層検出の畦畔より良好であった。また、東西方向の畦畔よりも、南北方向のものの方が明確に確認できた。畦畔は前段階と同様に、浅い谷地形部分に形成される。

遺物としては、13層中から弥生時代前期の上器片が少量出土している。14層出土のものと時期的に大差はない。水田の時期も14層で検出したものと同様に、弥生時代前期頃と考えられる。

15層出土の遺物はほとんどなかった。14層中からは縄文中期後半の土器(図11-1), 弥生前期を中心とした時期の上器片や土製品、石器が出土した(図11)。サヌカイト製の打製石器(図11-18・19)、粘板岩製の扁平片刃石斧の刃部の破片(図11-20)が川土したのをはじめ、サヌカイトの剥片も多数出土している。他に土製円盤の出土が目立った(図11-13~17)。図示した以外にも、土製円盤と見られる破片が多数存在した。また、13層中からは弥生前期の土器の小片が少量出土した。

15層中から出土する遺物の量は少なく、また遺構がほとんど存在しなかったことと考えあわせれば、縄文時代中期～後期頃には、本調査地点付近では人為活動がおよび始めていたものの、まだ希薄だったことがうかがえる。縄文後期段階の人為活動の中心は、これまでの調査成果から、大学構内の北東部と南西部にあることが分かっている。本調査区の位置する大学構内の南東部に本格的な人為活動が認められるようになるのは、弥生時代前期以降のことのようである。

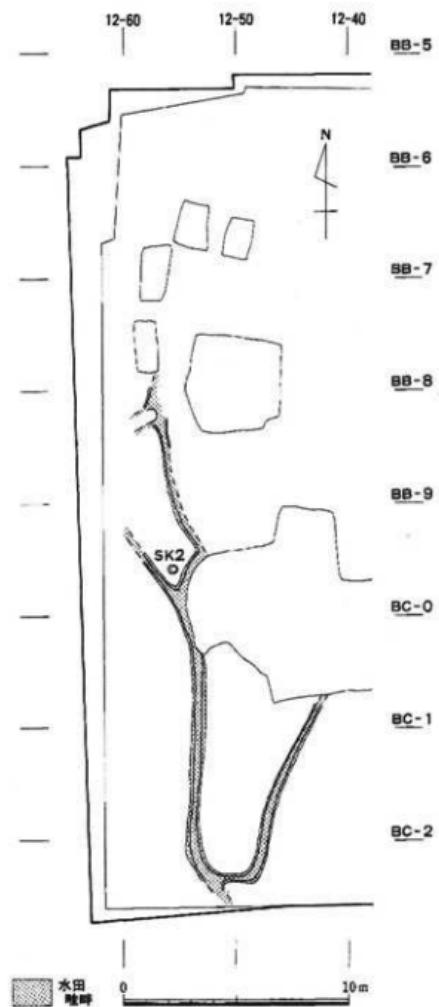


図10 13層上面検出遺構全体図 (縮尺1/250)

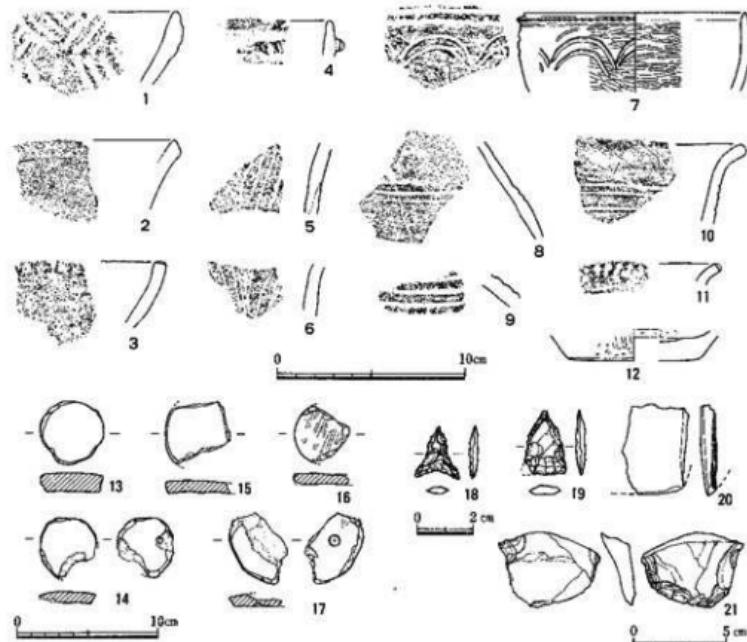


写真3 13層上面水田畦畔（北から）



写真4 13層上面水田畦畔（西から）

調査の成果



番号	断面・特徴	法 定	形状・手法の特徴ほか	色 調	附 土
1	刃文・鉋形	-	-	灰灰	細砂
2	刃文・鉋形	-	外縁に鋸歯で削めの刃文。ナメ。摩滅重ね。小細孔	灰灰	細砂多、角閃石
3	刃文・鉋形	-	便ナメ。『鋸削面に鏡文の可能性』。後削土基	灰灰	細砂少、角閃石
4	刃文・鉋形	-	L線上に鋸歯面が見れる。後削土基、摩滅	暗灰	細砂少
5	刃文・鉋形	-	刃文ナメ。刃文上の向み目は磨擦面で不規則	白灰	細砂、赤色粒
6	刃文・鉋形	-	外縁に鏡面文、6と同一固体の可逆性大。摩滅	暗灰灰	薄白
7	刃文・鉋 ■11.9	-	刃文上に斜めV字（小・深・裏削）。外縁二端の鏡面文様。1/3残存	灰灰灰	黒
8	刃文・鉋	-	芯縫2本。芯縫上は後削をなす。摩滅	黄灰白	細砂
9	刃文・鉋	-	芯縫3本。摩滅	灰灰	細砂
10	刃文・鉋	-	内：摩滅。外：鏡ナメ。頭部横3本縫。口内丸み	黄灰灰	細砂多、内閃石
11	刃文・鉋	-	側ナメ。口縫埋削。側小凹。外縫埋	米白	細少
12	刃文・鉋	*7.5	底部：外縫丁寧ナメ。外縫：ケズリ？後ミガキ。1/2削痕	灰灰灰	細少

番号	断面・特徴	最大径	厚さ	形態・手法の特徴ほか	色 調	附 土
13	三脚品円盤	4.5	1.3	打ちちぎれが入る。尖尖。摩滅	明黄褐	淡灰白
14	三脚品円盤	4.2	0.8	「平なナメ」。打ちちぎれが入る。下部に内丸1.1cm（未完成・頭成形）。1/4欠	青灰	灰灰
15	三脚品円盤	(4.7)	0.8	ト裏：「ヨギリ？」下縫：「ナメ・研」。打ちちぎれの平滑化毛むし。1/3残存。赤色粒	灰灰	内閃石多
16	三脚品円盤	(4.0)	0.8	ミガキ。打ちちぎれの平滑化毛むし。1/3残存	黄褐	細少・角閃石多
17	三脚品円盤	(4.0)	0.8	ナメ。打ちちぎれの平滑化毛むし。下縫に内丸（未完成・頭成形）。1/3残存	灰灰灰	灰少・細砂多。内閃石

番号	型番	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(kg)	特徴
18	石器	サクライト	1.8	1.6	0.3	0.5 円錐錐形
19	石器	サクライト	2.3	1.3	0.3	1.0 平底式。下面に素朴面がある。底部を欠割。
20	鉄片及石片	鉄板刷	—	—	—	表面的に鏡面の有無を観察
21	スクリーパー	駆動器	4.0	6.5	1.3	25.9 下端に刃部をつくりだす。

図11 13, 14層出土遺物（縮尺1/2, 1/3, 1/4）

### 3. 弥生時代後期～古墳時代中期の遺構と遺物

弥生後期から古墳時代初頭にかけて、浅い谷部分を埋めていくような形で12層が堆積する。微高地部分と微低地部分の比高差は、若干解消される。

この時期の遺構としては、継続的に形成された7条の溝と1条の溝状遺構を検出した。また、小規模な土坑3基と南北方向の耕作痕を検出した。溝群は、北東から南西方向にはしる。微高地と谷状部分との傾斜変換ライン付近を地形に沿って形成される。これらの溝は近接した時期に、同じような場所を何度も繰りかえし掘削して利用したことがうかがえる。また、溝の基底部のレベルは、いずれも2.7m前後にそろっており、14層（黒色土）上部付近で掘削が止まっており、14層を深く掘りこむものはなかった。耕作痕は、幅20cm前後、深さ5cm前後の浅い溝状をしている。いずれも不鮮明で、途中で消えてなくなる。

古墳時代前期後半頃に、11層が本調査区の南東部付近に堆積する。この部分は、近代まで高所として残る。古墳前期後半頃以降の遺構は、11層の堆積が認められる調査区南東部の微高地に存在する。11層では土坑1基と土器集中部一ヶ所を検出している。後述するが、土器集中部は古墳時代中期後半頃に形成されたものと考えられる。

#### (1) 12層上面検出遺構

##### ・溝

###### SD 3 (図12・14、写真5)

溝群の中では最も西に位置しており、BB-7ライン付近から南西方向に延びる。検出面での標高は2.7～2.9m、基底部の標高は2.4～2.5mである。幅は検出面で90～100cm、深さは30cm前後である。この溝群の中では、最も規模が大きい。埋土は、マンガン粒を多く含む灰褐色系の砂質土が土体となる。最下層には灰色の粗砂の堆積が認められる。

遺構の時期は、他の溝との関係から、古墳時代初頭に形成されたと考えられる。

###### SD 4 (図12・14、写真5)

SD 3の東隣に形成される溝である。北東から南西方向に延びるが、BC-1ライン付近で若干南向きに振り、SD 3と交差する。断面観察から、SD 3よりも後に形成されたことが分かる。検出レベルは、標高2.7～2.9mのところである。基底部での標高は2.5～2.7mである。幅は広い部分で45cm程度、狭い部分で30cm程度で、深さは約15cmを測る。埋土は、上層が粗砂を含んだ灰色系の粘土土、下層が灰褐色の砂質土である。

遺物には土器の細片が少量あるのみで、時期が特定できるようなものは出土していない。他

調査の成果

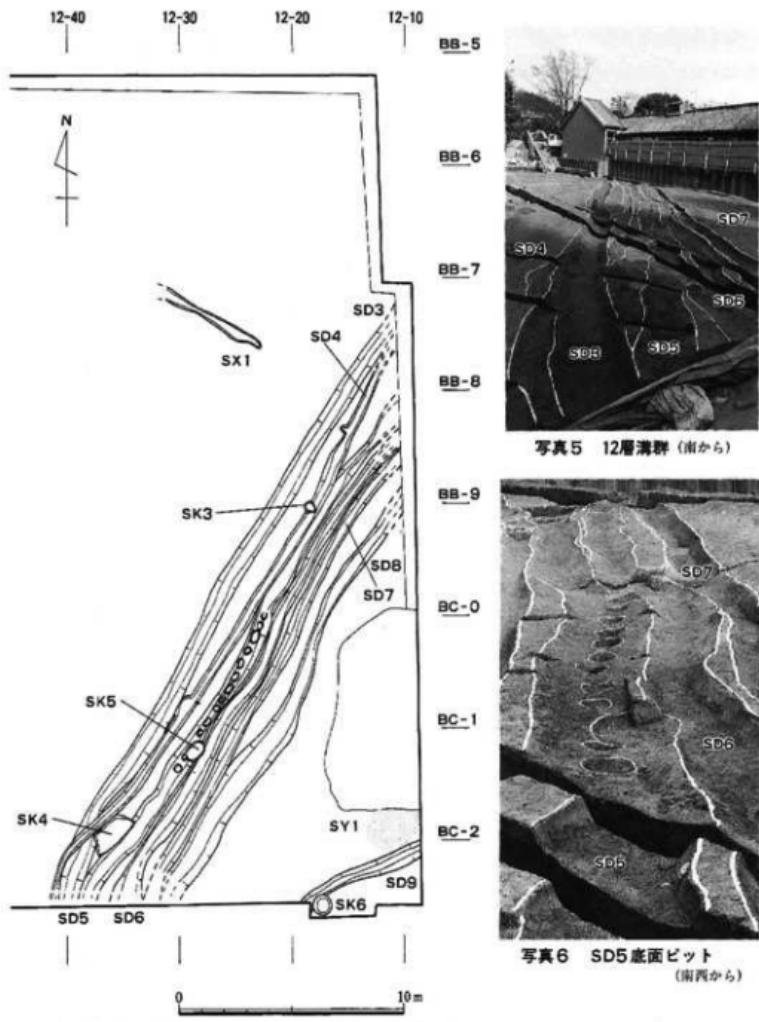


図12 11, 12層上面検出造構全体図 (縮尺1/250)

の溝と時期的にひらきがあるとは考えにくく、造構の時期はSD 3などと同様に古墳時代初頭頃と考えられる。

#### SD 5 (図12・13・14、写真5・6)

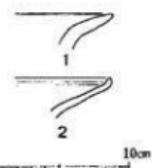
SD 4 の東側を、北東から南西方向にはしる溝である。SD 5 はSD 4 に切られており、SD 4 より古いものである。検出レベルは標高2.7～2.9m、溝の基底部のレベルは標高2.5～2.7mである。規模は、幅の広い部分で1m前後、狭い部分で60cm前後、深さ約15cmを測る。また、溝の埋土は褐色から灰色の砂質土で、マンガン粒が多く含まれる。溝の基底部では、長径50cm前後、短径20cm前後のビットを13個確認した。ビットの深さは、5～8cmを測る。ビット中の埋土は赤褐色の粗砂で、鉄分の沈着が顕著であった。このビットが、溝とどういう関係にあり、どういう機能を有していたのかは不明である。後述する土坑(SK 5)との関連も考えられるが、溝の底面に沿ってある点や、ビットがSK 5 に切られる点などを考慮すれば、溝とのつながりを重視しておきたい。

遺物としては、古墳時代初頭頃に属する壺の口縁部の破片(図13-1・2)が出土している。後述するSD 6 と接する部分で出土しており、どちらに帰属するか明らかにできなかったが、造構の時期を示していると考えられる。溝の時期は、出土遺物から古墳時代初頭頃と考えられる。他の溝とほぼ同時期である。

#### SD 6 (図12・13・14、写真5・6)

BB-8ライン付近から南西方向に延びる溝である。SD 5 の東側に位置している。土層断面の観察から、SD 5 に切られており、これよりも後に形成されたことが分かった。検出レベルは標高2.8～2.9m、底面のレベルは標高2.7m前後である。規模は幅40～75cm、深さ20cm前後を測る。埋土は灰色系の砂質土を主体とする。最上面には鉄分の沈着が顕著であった。また、埋土の4層には粗砂が多く含まれていた。

出土した遺物はわずかで図示した以外に土師器の小片のみである。SD 5 とSD 6 のいずれから出土したか確認できなかったが、造構の時期を示すと考えてよいであろう。造構の形成時期は、他の溝と同様に古墳時代初頭頃である。



番号	形状・特徴	法 番			形態・手法の特徴ほか	色 質	地 土
		口径	底径	高さ			
1	土師壺 壺	-	-	-	内面：摩滅、外側：擦ナゲ・下腹にハケメ	灰褐色	褐色多
2	土師壺 壺	-	-	-	1字なナゲ（光沢あり）	灰褐色(白) 売	無

図13 SD 5, 6 出土遺物 (縮尺1/4)

## 調査の成果

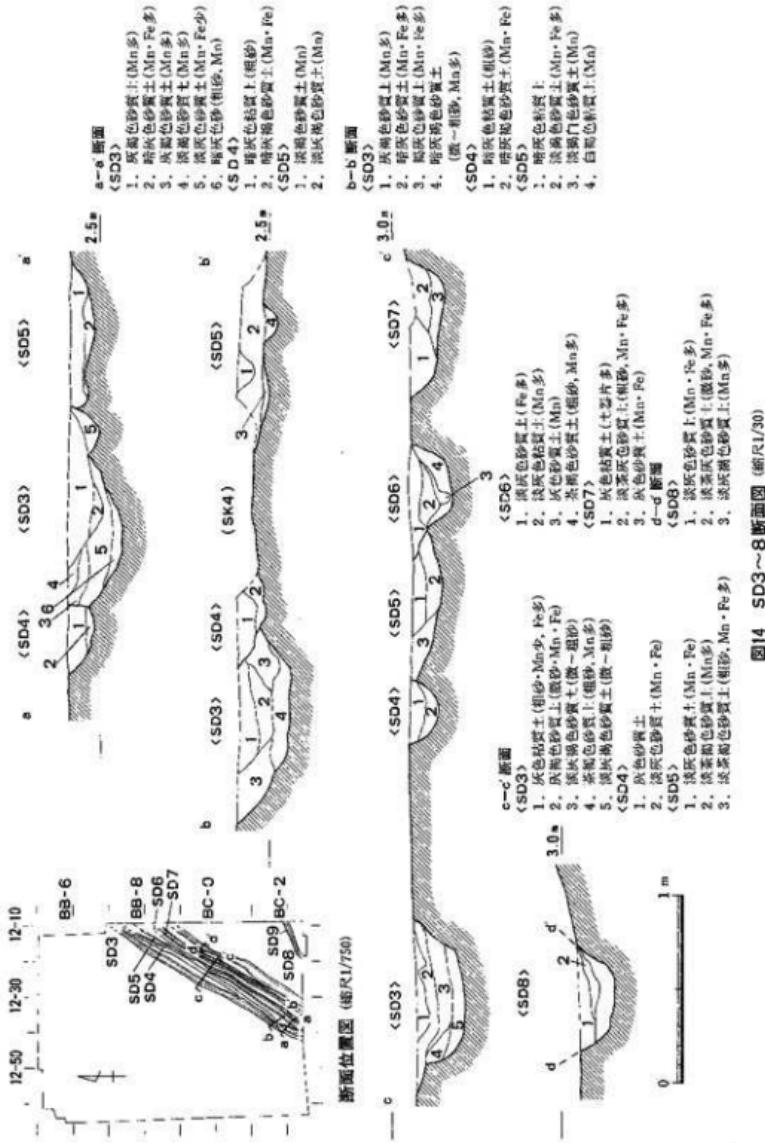
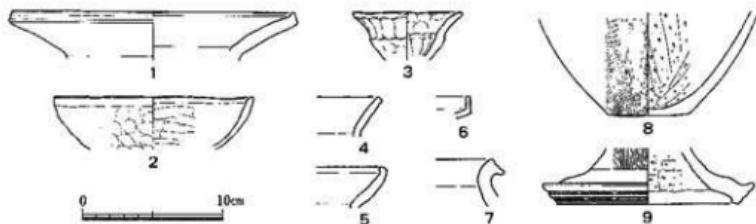


图14 SD3~8断面图 (断尺1/30)



番号	施設・構造	往　重			形態・手法の特徴ほか	色　調	植　土
		口径	底径	標高			
1 土器底 素	*	20.0	—	—	盛り・横ナギ、1/8段存	灰青～暗灰青	灰～細砂多
2 土器底 素	*	14.2	—	—	内面：工具使用ナギ。全体に削り立たれ、1/8段存	黄褐色	細砂、赤色斑、尖端石
3 土器底 素	*	7.8	—	—	ナギ上げ既成の神面、墨み大。1/4段存。手捏ね土器	黄褐色	無
4 土器底 素	—	—	—	—	折ナギ、外表面、シャーフを多く	淡黄灰青	豊砂多
5 土器底 素	—	—	—	—	横ナギ	淡灰褐色	豊砂多、赤色斑
6 土器底 素	—	—	—	—	削除泥棒 6本。小片	赤褐色	無
7 弥生 底	—	—	—	—	沈鉢 2本。摩滅。度ナギ?	赤褐色	豊砂多、角端石少
8 弥生 底	—	*5.7	—	—	外沿：ハケメ（ミタキに似る）。溝延。底部：摩滅。1/3段存	赤褐色	細砂多
9 弥生 高部	—	*12.5	—	—	沈鉢 3本。下部削り横ナギ。1/3段存	赤褐色	豊砂・角端石多

図15 SD7 出土遺物 (縮尺1/4)

## SD7 (図12・14・15、写真5・6)

SD6の東側に位置する。他の溝と同様に、北東～南西方向の方位をとる。検出レベルは標高2.9m前後、底部のレベルは2.7m前後である。溝の規模は、幅50～70cm、深さ約20cmである。埋土は大きく灰色粘質土（1層）と灰色砂質土（2、3層）とに分けられる。1層中から、十器片がまとまって出土した。

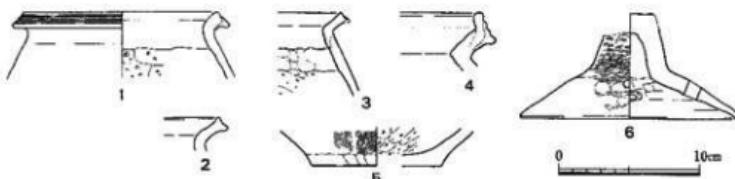
出土遺物としては、弥生後期から古墳時代初頭頃の上器がある（図15）。遺構の時期は、遺物から他の溝と同様に古墳時代初頭に位置づけられる。

## SD8 (図12・14・16、写真5)

SD7の東側で検出した。地形が敵高地に向かって高くなりはじめた部分に形成されている。BC-1ライン以南をSD8に切られる。検出レベルは標高2.9～3.0mであるが、若干削りこんだ段階で検出したため、本来の面はこれよりやや高い位置にあったであろう。底面のレベルは標高2.7m前後のところにある。検出面での幅は50～140cmを、深さは約30cmを測る。埋土は鉄分を多く含んだ灰色系の砂質土である。

SD8から、弥生時代後期の壺の破片数点（図16-1～4）、土師器の高杯（図16-6）などが出土している。弥生後期の遺物は下層からの巻き上げと考えられ、遺構の時期は高杯の時期である古墳時代初頭頃であろう。

## 調査の成果



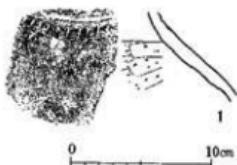
番号	種別・特徴	性 種			形態・手法の特徴ほか	色 調	耕 土
		口部	手縫	裏面			
1	骨 1 頭	φ13.0	-	-	外周平底、口縁：骨ナメ・比較3本・頭少。1/6残存	黒褐色	褐紅～暗赤多
2	骨生 骸	-	-	-	骨ナメ、口縁埋少	明褐色	褐紅～暗赤、赤色较少
3	骨生 骸	-	-	-	外周：ハク後側ナメ、口縁：骨ナメ・近縁1本（シャープ）	淡褐色灰	褐～暗赤、赤色较少
4	骨生 骸	-	-	-	丁字孔骨ナメ、口縁：比較3本	淡黃（〇）白	無砂
5	骨生 骸	-	φ9.2	-	近縁外周骨ナメ、外周：ハケ（浅い）・其使用ナメ？・深、1/6残存	黒褐色	褐紅多
6	土器器 酒杯	-	15.6	-	杯内側測試、器底内側上半工具使用ナメ、器底凹凸残存、内孔4ヶ所	黒、斑赤粒	褐～暗赤多

図16 SD8出土遺物 (縮尺1/4)

### SD 9 (図12・14・17、写真5)

調査区の南東コーナーで検出した。BC-2ライン付近から12-20ライン方向にむけてはしる。他の譜とは異なり東西に近い方向にはしる。微高地上に位置しており、検出レベルは標高3.0mである。深さは10cm、幅は約50cmである。

遺物は弥生後期の土器片が出土したのみである。これは下層からの巻き上げで、遺構の時期は古墳時代初頭であろう。



番号	種別・特徴	性 種			形態・手法の特徴ほか	色 調	耕 土
		口部	底縁	裏面			
1	弥生 骸	-	-	-	外：丸上がりの工具痕・鋸歯状縁・斜め刃。内：ケズリ・器底押定とナメ	淡黃褐色	白色多

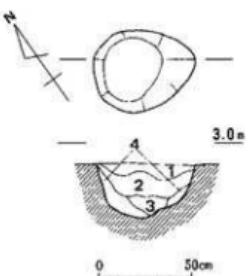
図17 SD9出土遺物 (縮尺1/4)

### ・土坑

#### SK 3 (図18)

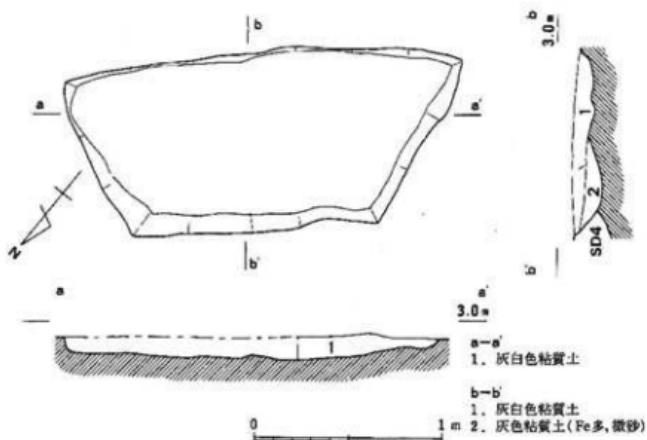
調査区東部のBC19区に位置する。検出レベルは標高2.9mである。平面形は卵形をしており、長径55cm、短径40cmを測る。深さ約30cmであり、底面のレベルは標高2.6mの位置にある。埋土は灰色系の砂質土である。

遺構の時期については、遺物が出土しておらず詳細は不明である。SD 4 を切って形成されており10層堆積以前には存在していた点を考慮すれば、古墳時代の範疇に収まるであろう。



1. 淡黃褐色白色砂質土 3. 密灰褐色砂質土  
2. 淡黃褐色白色砂質土 4. 灰褐色砂質土層

図18 SK3平・断面図 (縮尺1/30)



## SK 4 (図19、写真7)

調査区の南辺、BC31～BC32区で検出した。SD 3 と SD 5 の間に位置しており、双方を切っている。検出レベルは標高2.9m付近である。平面形は台形状をしており、規模は長辺で130～215cm、短辺で90～100cmを測る。深さは15cm前後で、底面のレベルは標高2.7～2.8mのところにある。底面には細かな凹凸が多く認められた。埋土は灰白色の粘性の強い土である。遺物は出土しなかった。

遺構の時期はSD 3、5 形成以降、10層堆積以前であり、古墳時代の範疇でとらえられる。



写真7 SK4断面 (南から)

## SK 5 (図20・21、写真8・9、図版一)

調査区の南東部、BC12～21区で検出した。検出レベルは標高2.7m付近である。このSK 5は、SD 5 の掘り下げ中に、溝の底部附近から多量の土器が出土したために確認した遺構である。そのため、検出時には上層部を大きく削平した可能性が高い。検出の際にはSD 5との正



写真8 SK5断面 (西から)

調査の成果

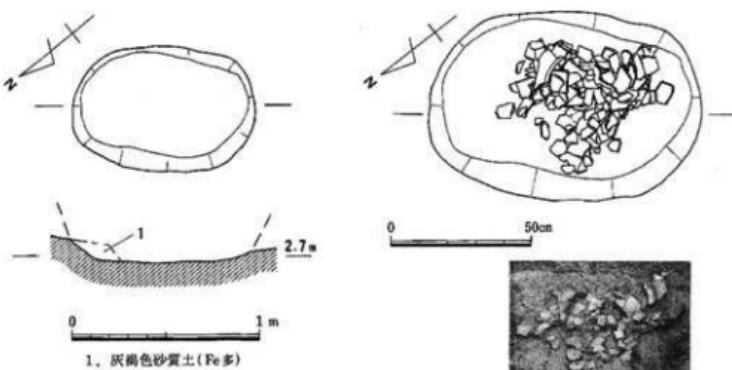
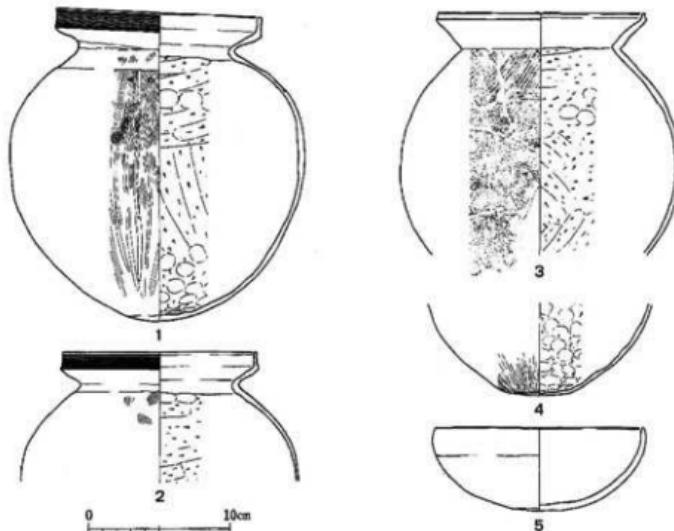


写真9 SK5 遺物出土  
状況 (西から)

図20 SK5 平・断面図および遺物出土状況図 (縮尺1/30, 1/20)



番号	種別・器種	性 質			形態・手法の特徴ほか	色 調	施 土
		口径	底径	高さ			
1	土師器 壺	*14.6	4.8	22.0	底: 内面ナメ, 井: 下手ナメ後ヒガキ(附)・底, 葵紋鏡7~8本, 開部剥皮2ヶ所	黒褐, 淡黄灰褐	細砂多, 角閃石
2	土師器 壺	*13.8	—	—	外腹: ハケ強み8? (裏面で不明瞭) ・底, 葵紋比鏡7本, 1/2底存	灰褐灰場	細砂多
3	土師器 壺	14.7	—	—	内質: 一部押付, 井底: タクナメハタメ(底付), 下腹ヒガキ7・底少,	黄褐地, 黄灰褐	細砂多, 粒砂粒
4	土師器 壺	—	約4.0	—	内: ケズリ後押付・底多, 井: 壺底・底, 葵紋: ヒガキ?, 瓦は弓彌	灰黑, 暗茶褐	細砂, 角閃石多
5	土師器 壺	*14.8	約5.0	5.9	葵紋 (丁寧なナメ?), 底部の腹は不規則, 外面: ヒガキ?, 瓦は弓彌	赤褐, 暗褐(底付)	細砂, 鹿角少

図21 SK5 出土遺物 (縮尺1/4)

確な前後関係を押さえることができなかった。

平面形は長楕円形をしており、検出面での規模は長径で95cm、短径で55cmを測る。検出面からの深さは約13cmである。埋土はSD 5 のものと類似しており、灰色系の砂質である。色調が若干濃く、鉄分の量が若干多い点でSD 5 の埋土と区別される。

土坑の底部付近では、土師器の破片が多量に出土した。土器を復元した結果、壺が3個体分と鉢が1個体分存在したようである。これら以外に別個体の土器片はほとんど混じていなかった。土器は壺1個体分を除き、ほぼ完形に近い状態に復元できた。出土状況から、完形の土器が土坑内で自然に壊れたという状態ではなかった。叩き割った土器をこの土坑にまとめて廻棄したか、あるいは土坑内で3個体分の土器を叩き割ったような状況が想定できるだろう。

土坑の時期は、出土した土師器から古墳時代初頭と考えられる（図21）。SD 5 出土の土器とほぼ同時期であり、遺物で前後関係を把握するのは困難である。

遺物や土層からはSD 5との正確な前後関係をとらえることができなかった。SK 5 がSD 5 底面のピットを切って形成されているのでSD 5より新しいかもしれないが、SD 5 の掘り下げ中に土坑を確認した検出状況を重視すれば、逆の可能性もあり得る。いずれにしても、遺物の時期や埋土が類似するという点を考慮すれば、SK 5 とSD 5 は比較的近接した時期の遺構と考えられる。

#### ・溝状遺構

##### SX 1（図12）

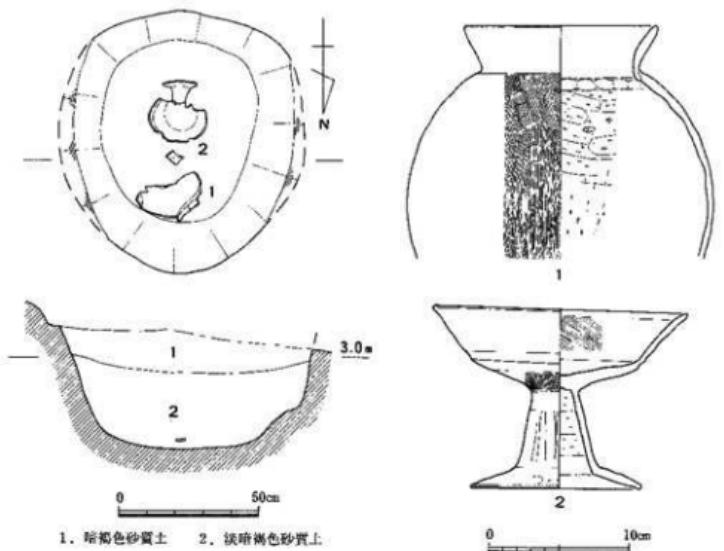
調査区のBB12-27区からBB12-36区にかけてで検出した遺構である。長さが短く、溝と断定するには根拠が乏しいため、溝状の遺構とした。検出レベルは標高2.8m前後である。この溝状遺構は、北西-南東の方位をとり、SD 3～9とは方向性が異なる。幅は20～50cm、深さは5～8cmである。遺物も出土しておらず、遺構の性格などは不明である。

#### （2）11層上面検出遺構

##### ・土坑

##### SK 6（図22、図版二）

調査区南東コーナーのBC12-12区に位置している。土坑の南半部は、調査区の南壁中にあつた。完形に近いと思われる土師器の高杯が顔をのぞかせていたため、調査範囲を若干広げて、土坑の範囲を確認した。11-b層上面で検出した。微高地から微低地へ移行する地点に存在している。検出レベルは標高3.0～3.1m付近である。平面形は円形であり、規模は直径約90cmを測る。検出面からの深さは50cmである。遺構中の埋土は暗褐色の砂質土で、11-a層に類似し



番号	測量・番号	性 質			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		11-a	11-b	11-c			
1	上野原 異材	13.8	-	-	外面下平：ハナ後とぎき（粗粒）・表面凸凹存・皿底・底、1/3底西存	赤橙	褐色・赤色很多
2	土器器 高杯	18.1	12.2	12.7	外側：裏柱削面取り方ナメ・輪郭部紅	淡灰灰	褐色砂多・内灰石

図22 SK6平・断面図、出土遺物 (縮尺1/20, 1/4)

ている。J.質が均質で比較的短時間に堆積したことがうかがえる。まだ土坑が開口しているうちに、11-a層が堆積してSK 6を埋めてしまったようである。

遺物としては、土坑の底部付近で、上部器の縁と完形に近い高杯が出土した(図22-1、2)。遺構の時期は、遺物から古墳時代前期後半頃に位置づけられるだろう。

#### ・土器集中部

##### SY 1 (図12・23、図版一)

調査区南東コーナーのBC-2ライン付近で、11-a層を掘り下げ中に、土器が量的にまとまって出土した。そのため、遺構の可能性があるとして精査したが、土層断面でも平面的にも明確な遺構は検出できなかった。遺構ではなく、東側からの土器の流れ込みと考えられ、地形が若干くぼんだ部分に土器が集中したものと考えた。土器集中部は、調査区外に広がる可能性もあるが、調査区内で確認できたのは約1.5m四方の範囲である。

土器は多くが小片で、磨滅したものが多い。出土量の多さに較べ、接合したものはわずかで

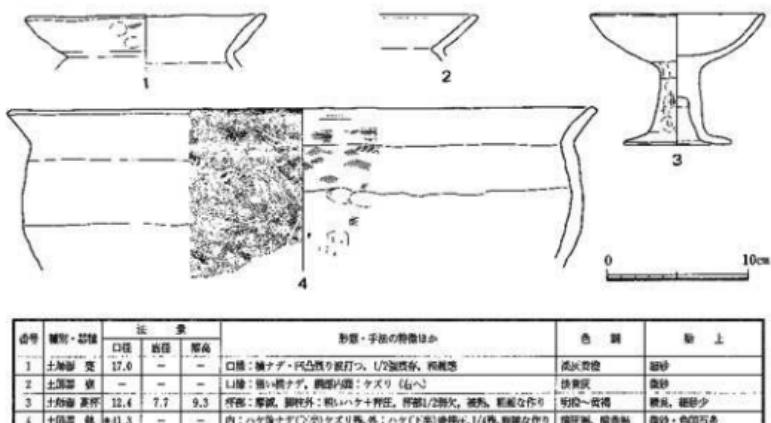


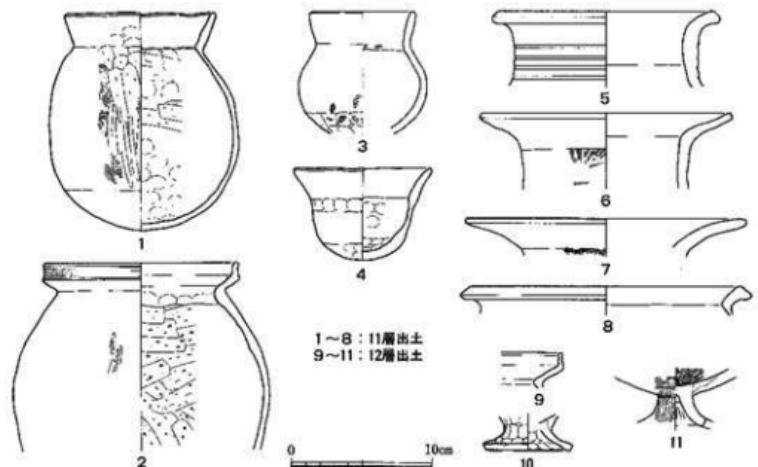
図23 土器集中部出土遺物（縮尺1/4）

ある。古墳中期の遺物が主体を占めていたが、前期のものも含まれていた。遺物には壺、高杯、大型の鉢がある（図23）。図示した高杯は杯部が丸くなっている、また脚部が細くしぶらっている。遺構の時期は、高杯の形態から判断して、5世紀後半～6世紀初頭頃であろう。図示しなかったが、高杯脚部の破片が目立った。

弥生時代後期から古墳時代中期にかけて、本調査区は微高地末端から微低地への移行部分に位置しており、集落域からはやや外れた場所に位置していたと考えられる。弥生時代後期古墳時代初頭の生活域は、本調査区の北東50mに位置する第10次調査地点にあると推定される。微高地は第10次調査地点から南東方向に向けて広がり、本調査区内で終息するようである。古墳時代初頭に形成された溝群は、ちょうど微高地の縁辺部を廻るように位置している。また、第10次調査地点では、溝群とほぼ同時期の生活域が存在を確認している。

SK 6と同時期の古墳時代前期末頃の集落域は、周辺ではまだ確認されていない。他にも周囲に古墳時代前期頃の生活域や生産域が、存在していた可能性がある。また、第10次調査地点では6世紀前葉の住居址や土坑などを検出したが、土器集中部の遺物とは、若干時期差がある。土器集中部は、5世紀後半頃に周囲で何らかの人為活動があったことを示唆するものであろう。

12層中からは、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器片が出土している（図24、図版二）。11層中からは多量の土器片が出土しているが、破片が多く圓化できたのはほんの一端である。図示できなかったが古墳時代中期に属する遺物も少量出土している。



番号	種別・器種	法 実		形態・手法の特徴ほか	色 番	地 土
		口径	底径			
1 十字縫 瓶	10.6	4.5	15.4	系: ケズリ型のハケ後とギヨ(鉢)・先端、底盤ナデ、口沿部に凹窓、底盤ナリ	淡赤灰	灰一細砂
2 土師器 瓶	*13.8	-	-	系: ナデ・ミガキ面、タテマツリ小切削、底盤ナリ、口縁: 有縫跡の二点丸、1/4残	灰褐色	細砂
3 十字縫 瓶	*7.6	-	-	ナデ、底盤外周: ハクヒ押圧、面あり、モルト底 1ヶ所、1/7残存	淡黄灰褐色	粗砂
4 土師器 瓶	9.8	-	6.5	口縁: 縫ナデ、底盤: 押圧・ナデ、底盤	黄褐色	灰一細砂
5 陶土 瓶	*15.4	-	-	横ナデ・ナデ、底盤: 本底各、1/4残存	淡黄白	細砂多
6 陶土 瓶	*17.8	-	-	ナデ、底盤外周: ハクヒ押圧ナデ、1/6残存	淡黄白	粗砂多
7 陶土 瓶	*20.0	-	-	口縁: 丁寧なナデ(工具?)、底盤外周: 塗: 1cm工具端面残存、1/3残存	淡黄灰褐色	粗一細砂多
8 陶土 瓶	*19.2	-	-	口縁: ナデ・押圧: ナジ(方向意識不不明)、1/4残存	淡~灰褐色	灰一細砂
9 上部器 瓶	-	-	-	側面欠陥 5ヶ所、朱漆内面ケズリ	灰黑	黄砂
10 陶粘土器	-	-	*6.9	押圧、全体に歪み、底盤、1/4残存	暗紫	粗砂多
11 陶土 高杯	-	-	-	ミガキ、瓶内面: シボリメ・焼ナデ・中に円孔(径 2mm)、1/8残存	赤紫	細砂多

図24 11, 12層出土遺物 (縮尺1/4)

#### 4. 古代の遺構と遺物

古代前半期になると、調査区南東コーナーの高所部を除いて、10層が堆積する。調査区南東部の微高地はまだ高所部として残るが、調査区北西部の微高地では、この時期に他の部分とはほぼレベルがそろうようである。

この時期の遺構としては、溝 6 条と小規模な土坑 2 基を検出している。溝はほぼ北東 - 南西の方位をとり、古墳時代初頭に属する 12 層検出の溝群と同様の傾向をしめす。本調査地点では、古代の溝群も、まだ地形による制約を受けているようであり、古墳時代初頭と同様に、微高地の縁辺部を巡るように形成される。遺物の時期から、10 層上にかけて検出した遺構の所属時期は、古代前半の 8 世紀頃と捉えられる。

## (1) 10層上面検出遺構

## ・溝

## SD10(図25・26)

溝群中では最も東にあり、最高地に最も近い位置にある。溝はBC-2ライン付近から始まって北東方向にはしり、BB-9ライン付近で蛇行して北西に方向が変わる。BB-9ラインから北へ2.5m付近で検出できなくなった。また、BC-2ライン付近から次第に深さが浅くなりはじめ、BC-2ラインから南へ約1mの地点で自然に消滅する。検出レベルは標高3.0mである。溝の規模は、幅が50~90cm、深さ7~10cmを測る。埋土は黄褐色砂質土の單一七層である。

遺物としては、下層からの巻き上げと考えられる土師器や弥生土器の破片が出土したのみである。

## SD11(図25・26)

SD10の西約5mの位置にある。12-40ラインから北東方向にはしり、BC-1ラインから北東へ約1mの地点で検出できなくなった。検出レベルは標高2.9m前後である。溝の幅は35~90cm、深さは10~15cmである。埋土は灰褐色系の粘質土である。遺物には、弥生土器か土師器と考えられる磨滅した土器の細片があるのみである。

## SD12(図25・26)

調査区の南辺部分で、わずか5mほど確認された溝である。12-40ライン付近から北西方向にのびる。SD12のみが北西方向にはしり、他の溝と流路の方向が異なっている。BC-2ライン付近から次第に浅くなってしまい、自然に消滅して終わる。SD11を切っている。検出レベルは標高2.9m付近にある。検出された部分で幅約50cmを測る。深さは10~15cm程度である。遺構の埋土は、灰色の粘質土である。

## SD13, SD14(図25・26)

SD13とSD14は、調査区の南西コーナーから北東にむけて斜めに横切る溝である。SD13と14は隣接した位置に掘削されている。BB-8ライン以南ではSD13がSD14を切る。BC12-30区以南では一条の溝として認識した。SD13かSD14のいずれかが、SD10やSD12のように途中で消滅したとも考えられる。埋土がどちらの溝のものとも判断がつきにくく、また現代のゴミ坑によって搅乱されているため、現状では確認できなかった。ただ、SD13がSD14に密接した位置にあることから、掘り返しの可能性が強いと考え、一条の溝になると認識した。

いずれの溝からも、弥生後期頃の土器片と古墳前半期の土師器が多數出土した。また、6世

調査の成果

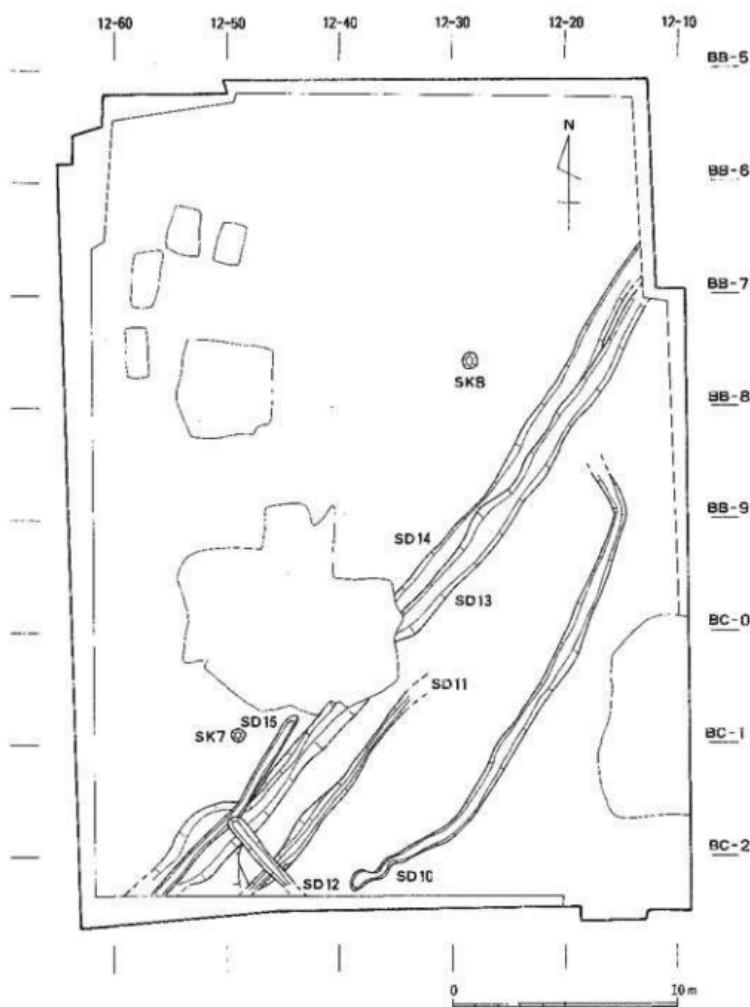


図25 10層上面検出遺構全体図 (縮尺1/250)

紀後半代の須恵器の杯身と杯蓋が散見された。弥生土器と土師器は、大きな破片もあるが、大半は細片化し、磨滅している。検出面が古代前半期の層位であることを考えれば、これらの遺物は下層からの巻き上げと考えてよからう。

SD13は10層検出の溝群の中では、最も規模が大きく、掘り形の残りも良い。検出レベルが標高2.9~3.0mで、底面のレベルは標高2.7m前後の位置にある。また、幅は単独で検出できた部分で80~120cm、深さは25~30cmを測る。底面はフラットで、掘り形は下半部が急峻に立ち上がるが、上半部は緩やかに上がっておさまる。埋土は、上層が鉄分を多く含んだ褐色の砂質土、下層は灰色の粘質土である。

SD14は検出された部分の大半が、SD13に切られている。検出レベルは標高2.9~3.0m、底面のレベルは標高2.7mの位置にある。幅は単独で検出された部分で100~120cmを測る。深さは25~35cmである。断面は一段掘り状になる部分もあるが、大半は逆台形になるようだ。埋土は大きく二つに分けられ、上層が灰色の粘質土層で、下層は基盤層（10層）の粘質土と灰褐色の粘土をブロック状に含んだ黄灰色の粘質土である。

溝が一条になるBC-0ライン以南では、深さが10cm程度と浅くなっていく。調査区の南辺付近では幅が次第に広がっていき、「たわみ」のような状態で検出した。

#### SD15（図25、26）

調査区の南西コーナーから北東方向にのびる溝である。総延長は約10mで、BC12-40区で自然に消滅する。SD13、14の上に形成されており、これらの溝より後に掘削されたことは明らかである。検出レベルは、標高2.8~2.9mである。幅は50cm前後、深さは10~15cm程度である。埋土は灰色~灰褐色の粘質土である。

#### ・土坑

##### SK7（図25）

調査区南西よりのBC12-41区で検出した。検出レベルは2.9m前後である。平面形はほぼ円形で、径50cmを測る。底面のレベルは2.6mに位置しており、深さは30cmである。埋土は灰褐色粘質土の单一土層である。遺物は出土していない。所属時期は溝群と同じく古代前半期であろう。

##### SK8（図25）

BB12-28区に位置している。検出レベルは2.85mである。平面形は長辺円形であり、長径70cm、短径50cmを測る。底面のレベルは2.4mのところにあり、深さは45cmを測る。埋土は、灰褐色砂質土と灰色粘質土の人きく二層に分けられる。遺物は出土しなかった。

調査の成果

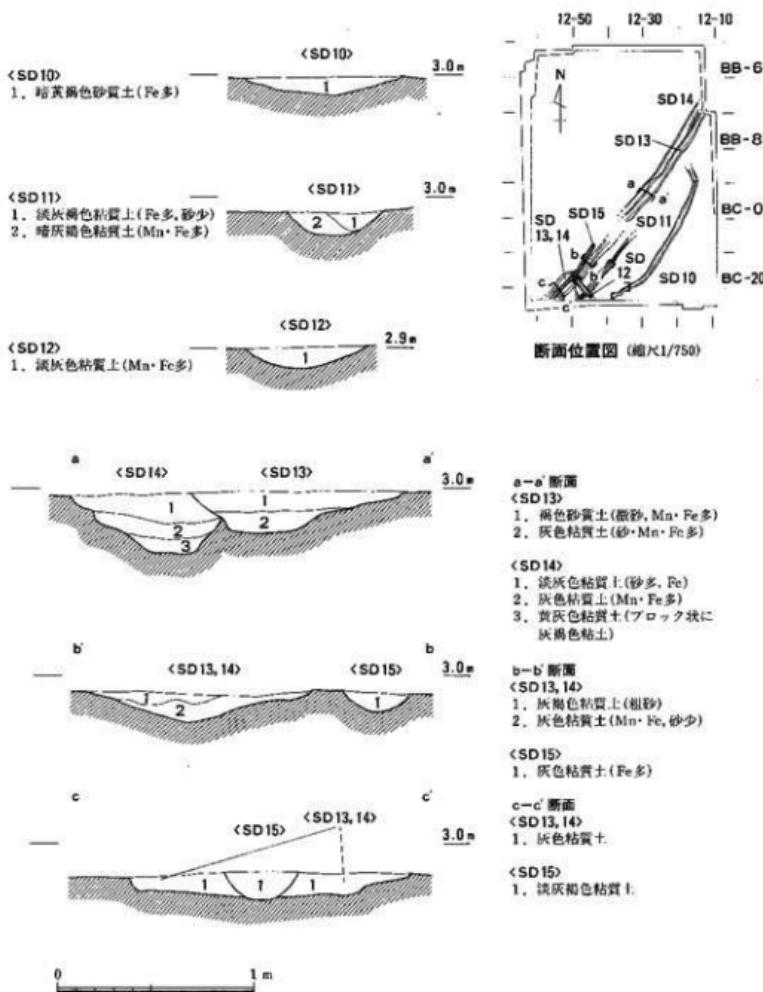
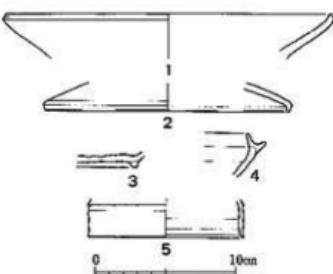


図26 SD 10~15断面図 (縮尺1/30)

10層中から出土した遺物には、古墳時代初頭頃の土師器片をはじめ、6～7世紀代の須恵器の杯類、8世紀代の須恵器の破片がある。ほかに、古代の土師器の甕の口縁部分が出土している(図27-1)。また、炉壁片が数点と鉄が出土した。第10次調査地点では、古墳時代の鍛冶炉と考えられる遺構が検出されており、付近で鍛冶を行っていた傍証となるであろう。



番号	種別・特徴	寸 法			形態・手法の特徴ほか	色	土
		口径	底径	高さ			
1	土陶器 瓢	φ23.5	-	-	模ナデ。縦割付2段底。1/8焼存	淡灰褐	赤褐色少、細砂少
2	土師器 瓢	φ17.5	-	-	模ナデ。末ね突き軽底。1/4焼存	青灰	無砂灰少
3	出土品研究	-	-	-	模ナデ。荷台内: ケズリ。ロクロ凹版: 右	灰灰	無砂少
4	須恵器 瓢身	-	-	-	模ナデ	淡灰	無砂少
5	鍛冶跡研究	φ11.2	-	-	模ナデ。自然底。研削。1/8焼存	淡青灰。火痕	無砂

図27 10層出土遺物(縮尺1/4)

これまでの調査で、津島岡大遺跡一帯では、古代の段階に大規模な水路と考えられる大溝や小規模な溝を確認している。今回の調査でも、他の調査地点と同様に溝群が見つかるなど、從来の見解と大きく外れることはない。

## 5. 中世～近代の遺構と遺物

中世に相当する層位は6～9層であるが、遺構が確認されたのは9層上面のみである。9層で検出した遺構は、東西方向にはしる溝2条と耕作の痕跡と考えられる鬱溝である。

中世後半期には、大造成によって津島地区一帯が現代と同様に平らな地形になる。本調査地點も同様な状況であるが、調査区南東部の微高地部分は、この段階でも高所として残る。

### (1) 9層上面検出遺構

#### ・溝

SD16(図28、写真10)

SD16は調査区の最北辺で検出した。おおむね東西方向の方位をとるが、若干北に傾いている。そのため12-30ライン以東では、溝の肩が側溝に切られるようになる。検出レベルは、標高3.0～3.1m付近である。底面のレベルは標高2.65～2.85mの位置にある。溝の規模は、幅1m前後で、深さ25～35cmを測る。

調査の成果

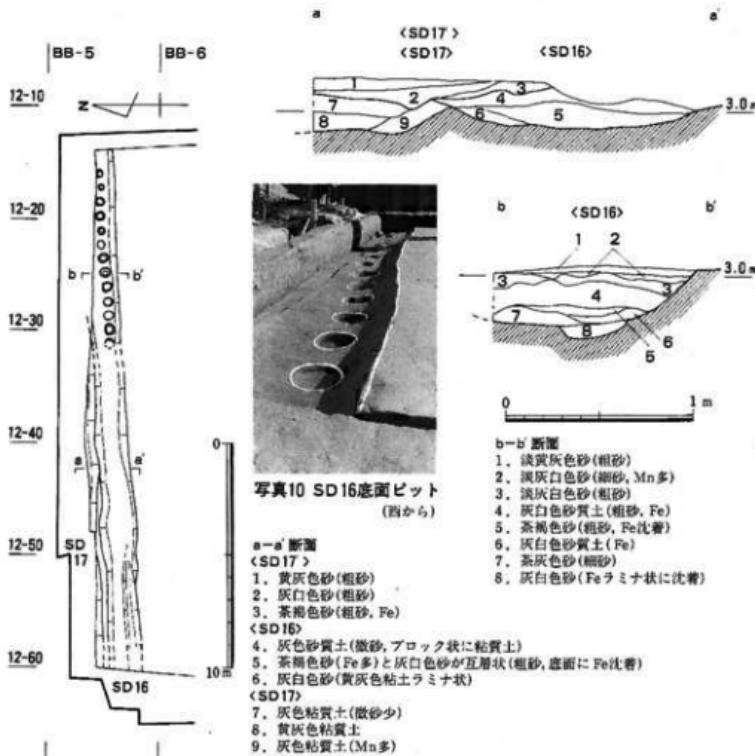


図28 SD 16, 17平・断面図 (縮尺1/250, 1/30)

12-30ライン以東では、溝の底面で、10~15cm間隔で小孔が穿たれていた。小孔は13個検出されたがだけであるが、本来はSD16の底面全体に連続して穿たれていたものと考えられる。小孔の平面形は正円か隅丸方形である。大きさは直径30cm前後、溝底面からの深さは10cmである。小孔の底面はフラットで、側面は急に立ちあがるものが多く、断面形は台形状を呈する。小孔の性格は不明であるが、第16次調査地点でも、SD16とはほぼ同時期の溝の底面から小孔が直線的に連続して検出されている。

溝の埋土は、全体に砂で構成されており、灰白色粗砂か鉄分が著しく沈着した茶褐色の粗砂が主体となる。溝の底面には鉄分が厚く沈着して固くなっていた。また、小孔内の埋土は鉄分を多く含んだ茶褐色の砂と灰白色の砂がラミナ状に堆積していた。埋土や鉄分の沈着状況など

から、比較的大量の水が、溝が埋没するまで恒常に流れていることがうかがえる。

遺物は土器の細片が出上したのみである。遺構の時期は、土層の関係から中世前半期の13世紀後半と考えられる。

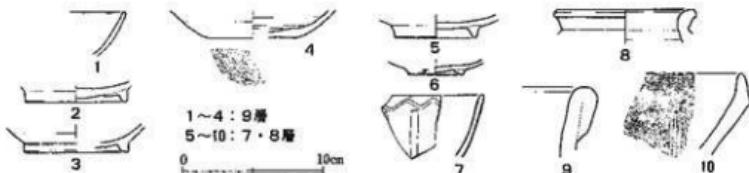
### SD17 (図28)

調査区の最北辺で検出した。SD16と同様にはほぼ東西方向にはしる。SD17は南側をSD16に、また北側を側溝に切られており、検出できたのはわずかな部分である。したがって、幅は不明であるが、深さは現状で30～40cmを測る。埋土は、黄灰色の粘質土が主体である。また、SD17は埋没した後に再び掘りかえして使用されている（SD17'）ことが、土屑から確認できた。平面的には検出できなかったが、埋土が白色の砂であり、SD17とは区別できる。

SD17とSD17'の時期は、SD16と同様に、中世の前半期と考えられる。

9層中から出土する遺物には、13世紀後半頃の土師器碗（図29-1、2）や縞模土器（3）がある。これらが9層の時期を示すものであろう。古墳初頭の土師器片をはじめ6～7世紀の須恵器も出土している。

7、8層から出土した遺物には、13世紀後半と14世紀初頭頃の土師器碗（図29-5、6）、15世紀代の備前焼の壺（図29-8・9）や描鉢（図29-10）の破片などがある。9層と同様に、古墳時代初頭頃の土師器や古墳時代後期から古代にかけての須恵器の破片が混在して出土する。6層からは中世末頃の土器や陶磁器の小片が出土した。



番号	種別・器形	寸法			形態・手技の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	高さ			
1 土師器 瓢	-	-	-	ナデ	底開口	赤茶	精良
2 土師器 瓢	-	7.2	-	底部外裏：竹添・ナデ	底丸	黄白	精良
3 縞模土器	■7.4	-	-	底外：ケズリ、柄部：ナデ・各トサケズリ底、沿脚：底面内凹・薄い、1/4底、斜削	底白、(袖)長脚底	黒	黒
4 須山窯 瓢	-	■6.2	-	底ナデ、底部外裏：余カリ、1/4底存	底黒	黒少	黒
5 土師質 瓢	-	5.8	-	横ナデ	底面白	黒	黒
6 土師質 瓢	-	3.9	-	内面：丁寧なナデ、外壁：割目。高台窯の粘土つなぎ巨頭壁	底黒～淡黃白	桃紅	細少
7 青磁 壺	-	-	-	ナデ、外面文様：楕円化	底丸	(袖)淡青磁	黒
8 内壁 瓢	■3.7	-	-	横ナデ、1/7周削、肩張地	底丸	赤茶灰	黒
9 胸器 盆	-	-	-	横ナデ、側脚底	小柄～寄承灰	細少	黒
10 陶器 瓢	-	-	-	横ナデ、内面に廻し刃、重ね表き底、底開口	底紫灰、灰黑	細少	黒

図29 7～9層出土遺物 (縮尺1/4)

## (2) 4層上面検出遺構

4層上面では、調査区南西部分を中心に、耕作痕と考えられる遺構を検出した。これは、東西方向の浅い溝状の遺構である。幅15~20cm、深さ3~5cm、長さは1~2mを測る。耕作痕の間隔は不均等であり、残存状況が断片的であることをうかがわせる。

遺構の時期は近世と考えられる。

## (3) 2層上面検出遺構

2層上面では、明治期の畠を検出した(図30)。調査区の北辺からBB-8ライン付近の間は、畠は南北方向に形成される。幅1.5m、高さ20cmの畠が約1m間隔でならぶ。また、BB-8ライン付近に、幅1.5m、深さ30cm程度の東西方向の溝が掘られる。それ以南では、畠は東西方向に形成される。幅2.5m、高さ20cmの畠が0.5~1m間隔でならぶ。最高地にあたる調査区の南東部分は、明治期においても周囲に較べ地形が若干高いようである。この部分は2条の道状の遺構で区画された部分がある。

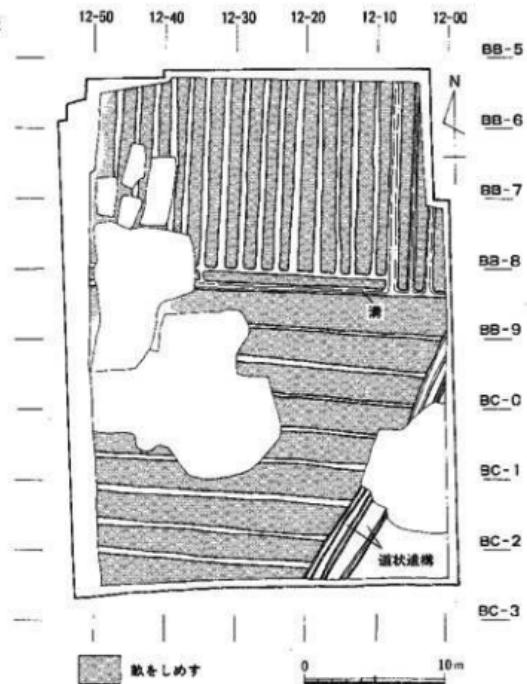


図30 2層上面検出遺構全体図 (縮尺1/500)

## 第4章 調査のまとめ

津島岡人遺跡第14次調査では、弥生時代前期、古墳時代初頭～中期頃、奈良時代（8世紀）、鎌倉時代（13世紀後半）の時期の遺構をそれぞれ確認した。本調査区は、微高地とその縁辺部に位置しており、微高地周辺部での土地利用状況を明らかにすることができた。

弥生時代前期の遺構としては、水田駐畔を2面検出したほか、水路と考えられる溝も検出した。近い時期の水田が2面確認されたことは、本調査地点が頻繁に水田域として利用されていたことがうかがえ、当時の人々の活動の痕跡が濃厚に残されているということであろう。津島岡大遺跡では、弥生前期に属する小区画の水田が大学構内のいたるところで確認されている。当該期の水田経営の資料が蓄積されつつある。しかしながら、こうした水田を残した人々の生活に関わる住居址などは、まだ大学構内では見つかっていないが、第10次調査地点では弥生前期の遺構も少ないながら確認している。周間に生活域の存在する可能性もあるだろう。

古墳時代初頭頃の遺構としては、溝をまとった状況で検出している。溝群は微高地の縁に形成されており、同じようなところを何度も繰り返して掘削し、利用したことがうかがえる。こうした溝群は、何らかの水利施設と考えられ、本調査区北方約100mのところにある第12・13次調査地点でも発見している。古墳時代初頭頃のこうした溝群は、構内遺跡の多くの地点で見つかっている。河道と溝の関係を把握できれば、当時の水利の状況が明確になるであろう。また、SD5の下層からは、土器片が投棄された土坑（SK5）を検出した。土坑の検出状況から、溝との有機的な関係も考えられる。また、土器の状況も、本文中でも述べたように、完形の土器器の甕と鉢がその場で打ち砕かれて捨てられたような状態で出土した。土坑の性格は不明と言わざるをえない。しかし、一定の評価を与えるとすれば、水にまつわる何らかの祭祀的な行為の可能性を考えられる。

上述した一連の溝群が形成された時期は、古墳時代初頭頃である。本調査区東方約50mに位置する第10次調査地点では、古墳時代初頭の遺構としては井戸と土坑を検出している。井戸の存在は、生活域が周辺に存在していたことを予想させるものである。本調査区の溝群とほぼ同時期の集落が周辺にあったものと考えられる。

古墳時代前期後半頃および中期頃の遺構としては、微高地上で土坑1基と土器集中部1ヵ所を発見したのみである。本調査区で当該期の包含層が確認できたのは狭い範囲であるためか、遺構密度は低い。こうした本調査区内における状況が、集落縁辺部の遺構のありかたを示唆するものかもしれない。当該期の集落域はまだ明らかになっていないが遺構内の土器の出土状況などは、周間に生活域が存在することを予想させるものである。

## 調査のまとめ

古代の遺構としては溝群を確認している。古墳時代初頭の溝群とほぼ同じような位置に掘削されている。古代には大規模な地形改変が行われており、また他の調査地点では、東西方向にはしる直線的な大溝が掘削されている。本調査地点の溝群はまだ地形の制約をうけて形成されているようであり、また調査区南東部の敵高地が近代まで、あまり削平されずに残されていることと考えあわせれば、古代の技術力では、この高所部分の地形を改変することができなかっただ可能性が考えられる。

こうした傾向は中世でも同様である。構内遺跡の調査から、中世には古代にもまして地形改変の造成が行われたことが明らかになっているが、古代と同様に、本調査区南東部の敵高地部分は大きな改変をうけなかったようである。

第14次調査地点は、弥生から古墳時代にかけて、第10次調査地点のように敵高地の集落域にあたると予想して調査に着手した。しかし、調査区の半分程度を浅い谷地形が占め、集落の縁辺部にあたることが分かった。また、遺構の状況から第10次調査地点では確認されなかつた時期の生活域が、周辺に存在する可能性も示唆できた。周辺で再び発掘調査が行われるようになった場合、集落域の存在に留意すべきだろう。

図版一 古墳時代の遺物(土坑5)



SK5-1



SK5-2



SK5-3



SK5-5

図版二 古墳時代の遺物（土坑6・土器集中部・包含層）



SK6-1



SK6-2



11・12層出土



11-12層出土



土器集中部

## 報告書抄録

ふりがな	つしまおかだいいせき						
書名	津島岡大遺跡 9—第14次調査—						
副書名	福利厚生施設南棟新営予定地 BB・BC12区						
巻次							
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告						
シリーズ番号	第13冊						
著者名	横田美香 岩崎志保						
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター						
所在地	〒700 岡山県岡山市津島中3丁目1番1号 電 (086) 251-7290						
発行年月日	1997年12月20日						
ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
津島岡大遺跡 第14次調査地点	岡山県岡山市 津島中2丁目 1番1号	33201	34度 41分 7秒	133度 55分 31秒	19961025 ～ 19960214	856m <sup>2</sup>	福利厚生 施設南棟 新営
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
津島岡大遺跡 第14次調査地点	田畑 その他	弥生前期 古墳時代	水田畦畔 轍 上坑	2面 7条 4基	土器		
	その他	古代	溝	6条	土器		
	その他	中世	溝	2条			

1997年12月15日印刷

1997年12月20日発行

## 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊

## 津 島 岡 大 遺 跡 9

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山市津島中3丁目1番1号

(086) 251-7290

印 刷 西日本法規出版株式会社

岡山市高柳西町1-23

(086) 255-2181